

政治老年学の誕生迄の歩み
—— 世論データに立脚して —— C.

神 江 伸 介

要 約

C. 政治老年学

【I】政治老年学の誕生（誕生）－政治老年学の方向性

はじめに

第一章 保守化

第一節 保革意識

第二節 政党支持

第三節 政治満足

第二章 政治行動（投票等）の不活性化

第一節 投票・棄権

第二節 後援会加入と演説会参加

第三章 争点意識

第一節 福祉

第二節 行政改革

おわりに

【II】政治老年学の誕生（参加）－高齢者の参加行動

はじめに

第一章 投票・棄権

第一節 年齢の観点から見た投票・棄権

第二節 投票理由

1 地元か国か

2 代表性

第三節 棄権理由

第二章 投票とデモグラフィック要因

- 第一節 性
- 第二節 教育程度
- 第三節 居住年数
- 第四節 都市規模
- 第五節 職業

第三章 その他の参加に関係する変数

- 第一節 10 年間一貫票
- 第二節 党か人か
- 第三節 機関紙購読、演説会参加、議員依頼

おわりに

【Ⅲ】政治老年学の誕生（党派）－高齢者の党派行動

はじめに

- 第一章 投票政党
- 第二章 政党支持
- 第三章 支持強度と性・年齢
- 第四章 イデオロギー
- 第五章 職業と政党支持
- 第六章 生活不満と政治不満
- 第七章 高齢者の党派選択のパス解析
 - 第一節 データ
 - 第二節 結果

おわりに

【Ⅳ】政治老年学の誕生（高松市）－高松市の新しい政治階層

はじめに

- 第一章 投票・棄権
 - 投票理由
- 第二章 投票とデモグラフィー
 - 第一節 性別と投票率
 - 第二節 教育と投票
 - 第三節 職業と投票
- 第三章 参加とその他の変数
 - 第一節 10 年間一貫票
 - 第二節 党か人か
 - 第三節 機関紙購読・演説会参加・議員依頼
- 第四章 党派行動
 - 第一節 投票政党
 - 第二節 政党支持
 - 第三節 イデオロギー
 - 第四節 政党支持の源泉

政治老年学の誕生迄の歩み（神江）

第五章 争点意識

第一節 学歴と年齢による分析

第二節 争点考慮に対する社会経済的地位の回帰分析（高松市）

おわりに

【V】政治老年学の誕生（三木町）- 三つの政治文化

はじめに

第一章 三つの地域社会における社会経済的地位の違い

第二章 三つの地域社会における政治態度の違い

第一節 政治参加

第二節 保守-革新

第三節 一貫票

第四節 候補者に対する見方

第三章 地域社会等に対する信頼

第一節 信頼

第二節 満足

第三節 国政信頼

第四章 ボランティアと政治

第一節 高齢者ボランティア

第二節 ボランティア一般

第三節 ボランティアと政治

おわりに

【VI】政治老年学の誕生（日米比較）- 高齢者（若者）の比較

はじめに

第一章 選挙運動との接触と投票

第一節 アメリカ

第二節 日本

第二章 集団と投票

第一節 アメリカにおける集団と投票

第二節 日本における集団と投票

第三章 政治不信と投票

第一節 政治不信（アメリカ）

第一項 外的不信

第二項 内的不信

第二節 政治不満と投票（日本）

第四章 投票参加と政治の基底的態度

第一節 投票参加と政治の基底的態度（アメリカ）

第二節 投票参加と政治の基底的態度（日本）

おわりに

おわりに（全体）

要 約

【I】政治老年学の誕生（誕生）－政治老年学の方向性

平均寿命が高齢化するに従って、政治意識・行動の衰退の始点が高齢化している。これは、近年の高齢者層の政治意識・行動が活発化を意味するという前提に立って、明推協の76～2000年のデータを分析し、①高齢化→保守化、②保守化する転換点の状態、③転換点に達するとそれ以上増減がないまま横ばい状態、④不活発化の転換点も高齢化、⑤高齢化は、福祉に関する意識の高まりを生む、等の現象を生む。

【II】政治老年学の誕生（参加）－高齢者の参加行動

従来の高齢者の政治の参加行動が①ライフサイクル型をとる、②年齢に依存して衰退・促進、と関係しないものがある、③老齢化＝加齢により不活発となるが、寿命が長くなった分だけ不活発化が始まる時点が遅れる。ある種の意識はとどまるところなく進み（「一貫票」や「人」や「手腕、地元候補者」）ある種の意識・行動（投票等）はとどまるところがある（10年ほど伸びる）。

【III】政治老年学の誕生（党派性）－少子高齢社会における高齢者の党派行動

①シーリング効果が存在する、②高年期も含めて成人政治活動期間が実に長くなる、③死ぬまで作用する変数とあるところで作用が有効でなくなる変数がある、④非政治化・保守化の超高齢型政治意識が存在する、⑤高齢期に入るときの値が重要で、選挙全年齢時の交点が重要、⑥長くその人に職業の影響を加えるようになった、⑦世代の影響が存在し、これを除くことが加齢とともに進む歴史的な課題。

【IV】政治老年学の誕生（高松市）－高松市の新しい政治階層

高松の調査データと全国のニューシニア階層とをくらべその発展度、意識の異同、を調べたら、(1)女性の落ち方が急など、従来型のシニアの特徴を維持している、(2)党派性は高松市では、投票政党では70－75歳期間に自民支持を増やしただけでなく更に同じ角度で70%のシーリングに達するまで自民化をまっしぐらに進む、(3)争点意識では、現実政治型で、学歴と年齢は高松市でも作用（政治倫理系と公害・環境系）、加齢型（福祉系）で学歴が関係しているが、エリート型では大卒者に（安保系）関心が高い、民主型で学歴差がある。(4)回帰分析では、ニューシニア社会に向けて発展途上。

【V】政治老年学の誕生（三木町）－三つの政治文化－

(1)西地区は政治とボランティアにおいて非高齢層と高齢層との断絶、(2)高齢者は断絶された中で、高齢者自身の助け合い、(3)農村的地域の特徴として南地区では非高齢層との断絶を明確な形では見せない、(4)都－農の中間に東地区が位置し、高齢者は社会的活動もやらないが政治に対する関与も低い。

【VI】政治老年学の誕生（日米比較）－高齢者（若者）の比較

(1)米では高齢者が友人・家族との政治議論を通して若者に積極的になるように、(2)世代間の断絶は約半分の同居、日本では若者の選挙情報摂取活動は広がっているが、高齢者の不活発さが甚だしい、(3)投票と集団に対する好感度の関係ではアメリカでは若者と高齢者で前者の方が多い、日本の場合は高齢者＝「町内会・区会」、若者＝「婦人会・青年団」という専属のクライアントを持っている。(4)「政治不信と投票」では、アメリカでは若者と高齢者合意が多く、明推協のデータでは高齢者に政治不満があると棄権する。(5)「政治の基底的态度」では、政党支持強度がまだ強く両国の国民を規定している。おわりに

C. 政治老年学

【I】政治老年学の誕生（誕生）－政治老年学の方向性

はじめに

明推協の1976年から2000年の調査を分析することを以て選挙研究の老年学を論じる。高齢化の時期における政治老年学の初めである。年齢との関係で、保守化、政治行動（投票等）の不活性化、そして争点意識を分析。

結論：平均寿命が高齢化するに従って、政治意識・行動の衰退の始点が高齢化している。これは、近年の高齢者層の政治意識・行動が活発化（＝アンチエイジング）を意味。

第一章 保守化

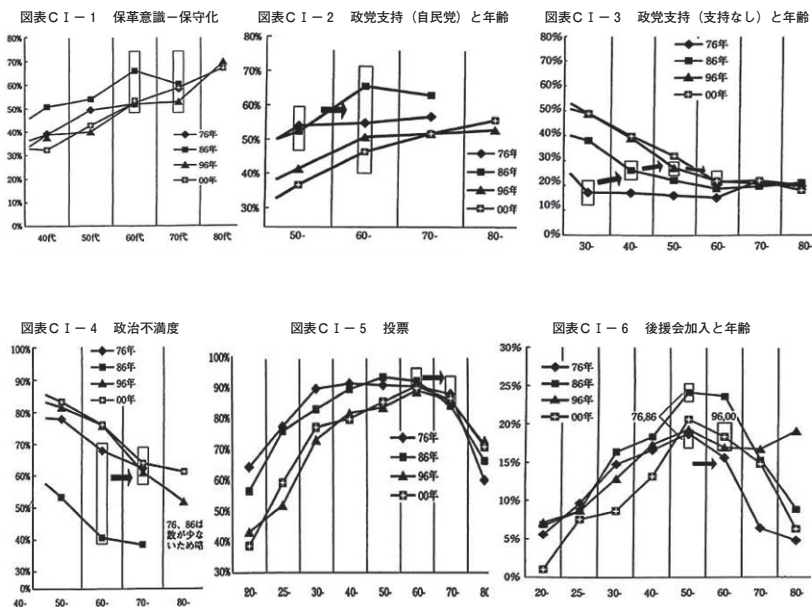
近年の平均寿命の高齢化に伴い、加齢による保守化の傾向に変化は見られるだろうか？ 時代による変遷の有無。

第一節 保守意識 図表C I－1, 2, 3

「保守」と答えた者は、加齢に伴って、右肩上がりに増加（図表C I－1）。例：76年と86年のデータでは、保守化の傾向は、60歳代で鈍化している。96年、2000年においては、保守化の傾向が鈍化。

第二節 政党支持 図表C I－4, 5, 6

保守化の傾向は、具体的な政党支持との関係では、自民党支持という形で現れる。支持の態度を決定していない支持なし層は、高齢化に伴い保守化する可能性が高いので、



支持なし層の態度変更の時期によっても、加齢に伴う保守化を間接的に見る(図表C I - 2)。政党支持においても、近年の加齢による保守化の進行が高齢化。支持なし層の態度変更の時期も、高齢化(図表C I - 3)。非自民層を考慮に入ると(表省略)、支持なし層が約2割に一定化した後も、非自民層の自民党支持層化の過程が続いているわけで、2000年の場合はその趨勢は70歳代でも未終了。

第三節 政治満足

政治不満度は、20歳代後半から30歳代に、ピークを迎え(図表省略)加齢とともに、下げ止まっている(図表C I - 4)が、政治不満度においても、近年の加齢による保守化の進行時期が高齢化。

第二章 政治行動(投票等)の不活性化

一般に、高齢化は政治行動の不活性化。近年の平均寿命の高齢化に伴って変化しているだろうか？

第一節 投票・棄権

投票したと答える確率は、若年層では低く、中年で頂点を迎え、加齢に伴い減少する（図表C I - 5）。転換点が高齢化しているのは、平均寿命が伸びて健康な高齢者が増加し、投票に行く者が増加したことに起因。

第二節 後援会加入と演説会参加

後援会加入の割合は、50歳代でピークを迎え、加齢に伴い減少（図表C I - 6）。96年のデータでは、転換点はなく、むしろ上昇。演説会参加の割合は、76年のデータでは急減している、96年のデータでは、80歳代でも減少していない（図表C I - 7）。

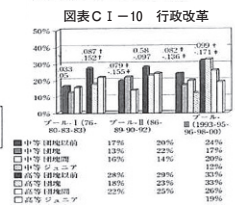
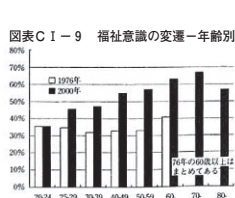
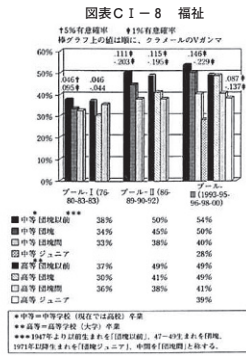
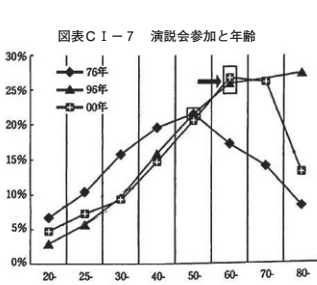
第三章 争点意識 図表C I - 8, 9, 10

平均寿命の高齢化に伴い争点意識はどうか、争点として、福祉、行政改革、税金、…データは、14種類の国政選挙調査（衆参）を三つに分割してプールしたものを使用、福祉、行政改革に関してのみ、影響が大きい。

第一節 福祉

福祉問題への意識に関しては、プールⅠ～Ⅲにわたって、30%（始点最低）から54%（終点最高）（図表C I - 8）。意識の高さに関して学歴上の差は見られない。有権者の関心は加齢に伴って高くなる（図表C I - 9には76年と2000年の横断図）。

年齢と福祉意識は互いに重なり合うように進んでいる。2000年は年齢の効果を持ったのであるが、そこに団塊の世代がいる。団塊の世代がまもなく退職・引退を迎える。福祉への意識の高まりは、彼らの漠然とした不安を反映。



第二節 行政改革

行政改革に関しては、加齢に伴って有権者の関心が高。高学歴であるほど関心が高く加齢に伴う関心の高まりは、世代要因を反映している(図表C I - 10)。世代と学歴に絡んで、団塊は他の世代とともに、不況の争点を選んだり、ジュニアとともに自然保護の問題に目を向けたりすることで連帯の方向に向かうことができるべきである。

おわりに

(一)①高齢化は、政党支持、投票政党、保革意識等、全ての分野で保守化をもたらす。②保守化する転換点は、平均寿命の伸びに伴って高齢化する傾向、③転換点に達するとそれ以上増減がなのまま横ばい状態(シーリング効果)。(二)①高齢化は、投票等の政治行動における不活発化、②不活発化の転換点は平均寿命の伸びに伴って高齢化、③転換点に達すると下がり始める。(三)①高齢化は、福祉に関する意識の高まりをもたらす。②行政改革については、中でも高学歴者は、今後20年~30年のうちに高齢化する団塊世代。いずれにしても、日本の21世紀は活発な保守の高齢者で占められることは明らかであり、政治の議題も大きくそれに規定されることになるだろう。

【II】政治老年学の誕生(参加)－高齢者の参加行動

はじめに

少子高齢社会に直面した老人が従来の老人としての特質を持ちながらどのようにして新しい老人になろうとしているかということ、政治参加でどこまではっきり探れるかの試み(データ:1976年の衆院選から2001年の参院選のプールデータ。1989年以前のデータを第I期、1989年より後のものを第II期。高齢者の区別を、前期高齢期(65-74歳)と後期高齢期(75歳-)に位置付ける)(図表C II - 1)。

1. 第I期、第II期の期間に分けたのはこの25年ばかりの間に選挙人の行動・態度上の重要な変化があったから。二期間の範囲の中央1983年と1996年が二つの期間を各集約。

2. 二期間は量的に相当異なる。第一に第I期間に30-40歳代周辺に固まっていた団塊の世代が40-50歳代へと動いた。第二に、少子化傾向が第II期の40歳代より下の年齢階層に現れ、高齢化傾向はそれより上の階層に現れる。

3. 回答票でも同じ質問が必ずしも全ての調査年度にわたって聞かれているわけではない等、の問題があるが基本的には解決できない。

4. 従来型の老人とは、基本的に老人の三つの試練をもつが、それは、再就職の意欲

の広がり、夫婦核家族化、健康に気をつける等、新老人に取って代わられる。

政治で言い換えるなら、従来型の老人の参加行動の特徴は、参加は、①若い頃低く、中年で伸び、高齢期で下がるというパターンをとるライフサイクル型をとる、②年齢に依存して衰退するものと依存して促進されるものと、年齢にかかわらずのものとがある、③老齢化＝加齢により不活発となる、というものである。

新しい老人とは、以上の1.から3.までの特質をもちながらも、寿命が長くなった分だけ不活発化が始まる時点が遅れ、以前の不活発な期間はそれまでの活発な中年時期とは変わらないか活発－不活発の中間の値をとる、という特性をとるであろう。

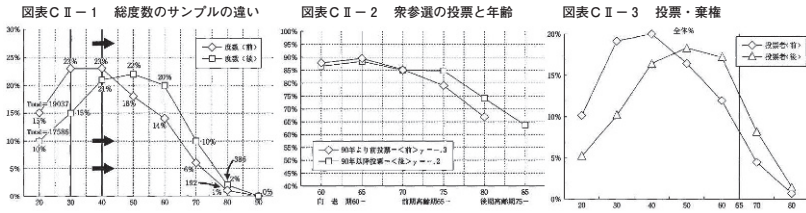
該当変数が、1. 第Ⅰ期のデータから高齢者の不活発化を示す変数であるか、2. 第Ⅱ期間は第Ⅰ期間と同じく、まだ高齢者の不活発化を示しているのか、3. 現在は、前期高齢期と後期高齢期との間の違いの残存は、4. 全体の割合に対する貢献度はどうか、ということを検討する。

第一章 投票・棄権

第一節 年齢の観点から見た投票・棄権 図表CⅡ－1, 2, 3

変数	不活発化（第Ⅰ期のデータで） ○＝する △＝しない ×＝その他 太字：データのグラフ	第Ⅱ期のデータで前期高齢期は尚不活発化か ○＝75歳以降に若干下がりがつつもずれている △＝跳ね上がるか同じ値 ×＝その他 太字：データのグラフ	第Ⅱ期のデータで前・後期高齢期の様子 ○＝違いがある △＝違いがない ×＝その他 太字：データのグラフ	国民全体への影響の状況 ○＝高齢者に拡大し全体もそれに依存 △＝高齢者の部分は議題でなくなった ×＝その他 太字：データのグラフ
年齢	○	○	○	○
	図表CⅡ－1	図表CⅡ－1		図表CⅡ－2

①図表CⅡ－1：第Ⅰ期のデータでは活発だった投票参加が65歳の前期高齢期を境に下降に転じている。投票参加は60%強から90%強まで上昇し、その後急速に減退する、あたかも身体状態の衰退に応じたような、変数でもある。②第Ⅱ期では若干落ちるのみで基本的には75歳までは変わらず活発。75歳以上になると急速に落ち始めそのカーブも第Ⅰ期と同じであるが、後ろに10年ずれた。③それまで85%ほどで3.5%程度の差だったものが75歳になって85歳の地平まで20ポイント強急落するのである。④図表CⅡ－2では、投票層は第Ⅰ期と第Ⅱ期でははっきりと違いがある。投票層を大き



く中年以上層に移した。少子高齢社会には一般的な現象であるが、投票層を大きく高齢層に依存させるとともに、終点も80→90歳のほうに拡大。

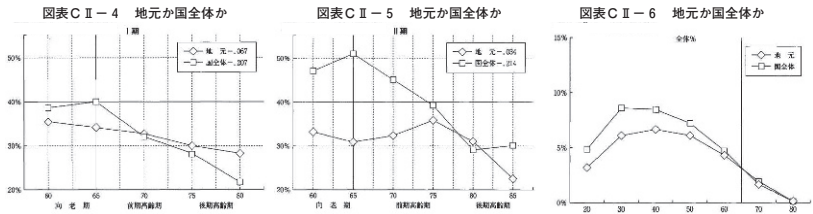
第二節 投票理由 図表C II-4, 5, 6

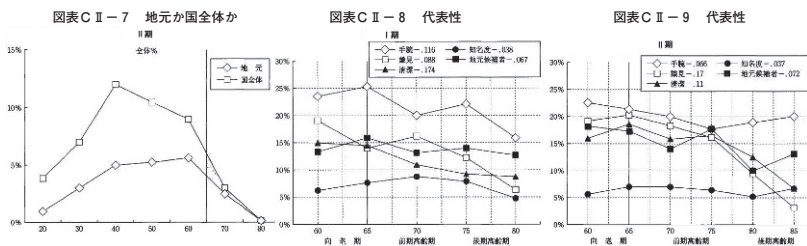
変数	1. ○△×	2. ○△×	3. ○△×	4. ○△×
地元か国か	○	○	○	○
	図表C II-4	図表C II-5	図表C II-4と図表C II-5	

図表C II-7, 8, 9

変数	○△×	○△×	○△×	○△×
代表性	× 図表C II-7	○ (×を含) 図表C II-8	○ (△手腕)	×

1 地元か国か ①図表C II-4: 「地元」と「国」の二つ。高齢者たちは形は逆U型。「地元」を典型的としてとると、スタートの20歳が20%, 55から70歳までが30%強までの頂点でそれを境に落ち始める。「国全体」タイプの代表が落ち方が強いが、高齢者にとって地元より国の方が軽い。②図表C II-5: 第II期間は第I期間と較べて「地元」が75歳と落ち始める時が10年後に延びた。第I期の65からの直線降下と較べて第II期の80歳から85歳は平板。「国」は第I期と同じく65歳からで、第I期の高齢者での落ちはじめの線は65歳=40%であるので75歳=40%で「地元」とそろっている。





③前期高齢期と後期高齢期との間の現在の違いは、「地元」で前期高齢期と後期高齢期とは違ってくる。④全体の割合に対する比率の第Ⅰ期と第Ⅱ期別に、**図表CⅡ-6**と**図表CⅡ-7**に示した。全体として中年を中心に「国全体」が多数派となりつつある。その傾向は向老期にも影響を与えて大体向老期になると、国全体指向に塗り替え始めた。

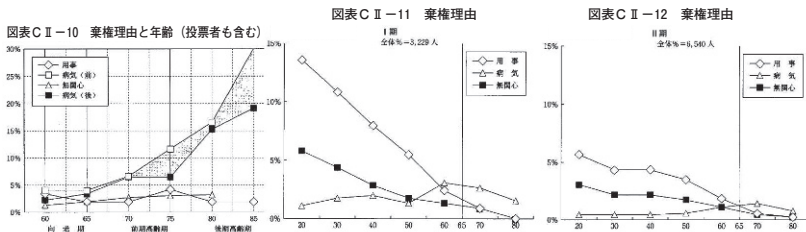
2 代表性 政治家個人に関する投票理由＝「代表性」と仮に読む。択一式。衆院選の際に、①**図表CⅡ-7**「地元」候補者は、若い頃低く、中年で伸び、高齢期で下がるというパターン。「手腕」も似たパターン。「清潔」も「識見」も高齢期で落ちるという型。②**図表CⅡ-8**第Ⅱ期間に「手腕」と「地元候補者」へ集中して回答が集まることにより、老齢化＝不活性化に反する要因がある。③後期高齢期で第Ⅱ期のデータでも落ちているのは、「識見」「地元」「清潔」である。一つだけ突出しているのが「手腕」である。85歳になっても衰えない。④（図表省略）全年齢層で「手腕」が「識見」に入れ替わるというのが大きな傾向として見られるが、高齢者ではそう大きくない。

第三節 棄権理由 図表CⅡ-10, 11, 12

変数	○△×	○△×	○△×	○△×
棄権理由	○ 図表CⅡ-10	○	○ 図表CⅡ-11	△ 図表CⅡ-12

高齢者と関係がある理由として「用事」、「病気」、「無関心」の3つ。

①**図表CⅡ-10**：「病気」は4%でそれから増加して46%。ゼロに近い若・中年層と異なり、最大の要因である。若・中年層で一番多いのが「用事」。若・中・老にわたりあまり変わらず選挙に「無関心」である。②高齢者の場合病気だが**図表CⅡ-11**の■がしめすように、第Ⅱ期になり75歳までは前期高齢期と余り変わらない。③第Ⅰ期では前後期高齢期で区別がつかなかった。第Ⅱ期ではそれは75歳から始まる。④「病気」は、**図表CⅡ-11**が示すように第Ⅰ期では数が少なくなるので衝撃を与えないが、**図表CⅡ-12**が示すように第Ⅱ期では殆どほかの理由と変わらない。

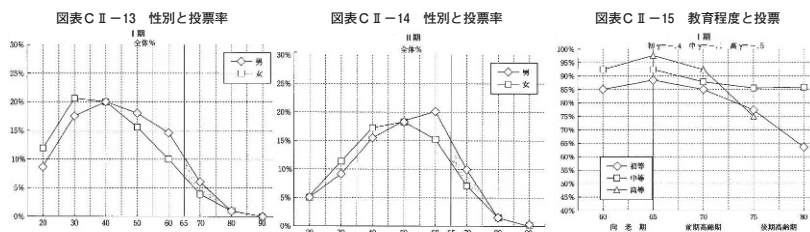


第二章 投票とデモグラフィック要因 図表C II-13, 14, 15

第一節 性

変数	○△×	○△×	○△×	○△×
	○図表C II-13	○図表C II-14	○	男○(△女) 図表C II-13, C II-14

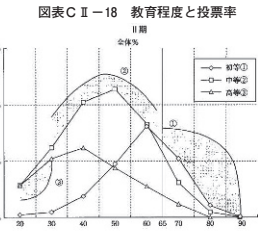
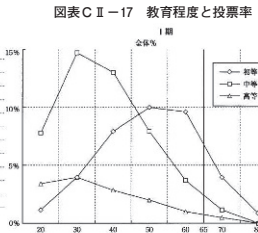
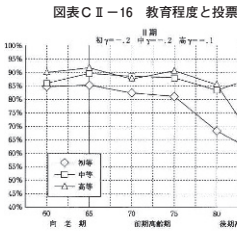
①図表C II-13の図はサンプルで言うとのほうが低投票率から出発し30歳前に男が女子を抜き5%程度の差で55歳まで行き、男のほうは65歳から女の方は55歳から急速に不活発に。②図表C II-14によると、第II期間には、男は完全に・女は5%程度の違いで不活発になる。75歳を過ぎるころ男女の同じパターンが再現。③前期高齢期がプラトー、後期が急降下である。④図表C II-13, 14に見るように、男は第I期から第II期にかけて60歳を中心とする層に投票率を依存し女は中年層依存。



第二節 教育程度 図表C II-16, 17, 18

変数	○△×	○△×	○△×	○△×
○初・高(△中)	○初(中・高)	○初(△中・高)		△初→中→高

政治老年学の誕生迄の歩み（神江）

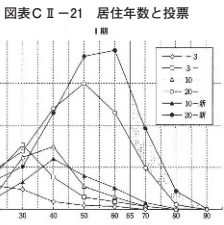
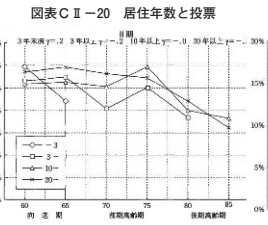
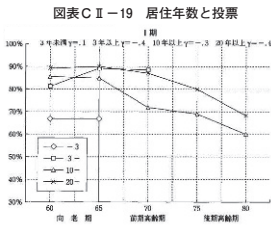


①図表C II-16では、高齢期で、初等・高等が不活性化のパターンを示し、中等がプラトーである。②図表C II-17によると、すべての階層でガンマを弱めて活発となっているし、数的割合も増えた高等卒業層が参入者である。第Ⅱ期中等と変わらない投票率を挙げることで一つの勢力になった。③中等・高等卒は80歳までの投票率は変わらないが、85歳以上まで高い投票率を維持するのは中等のみである。④図表C II-18では、まだ60歳以上の投票率に依存しているのは初等卒で、中等・高等は中年以下を支えているが、順序としては中等②が入って初等①と交代して多数派を占め、のちに高等卒③にヘゲモニーを譲る。①→②→③という形だ。

第三節 居住年数 図表C II-19, 20, 21

変数	○△×	○△×	○△×	○△×
居住年数	○図表C II-19	○20年以上 (△3-10年) 図表C II-20	○図表C II-20	○図表C II-21

①図表C II-19では、居住年数が20年以上のほうが10年以上のものよりよく投票し、1990年代ぐらゐまで65歳でその分界点は10年に強く20年にゆるかった。②図表C II-20では、3-10年以上の中期居住者が75歳まで、むしろ投票率を上げてきた。

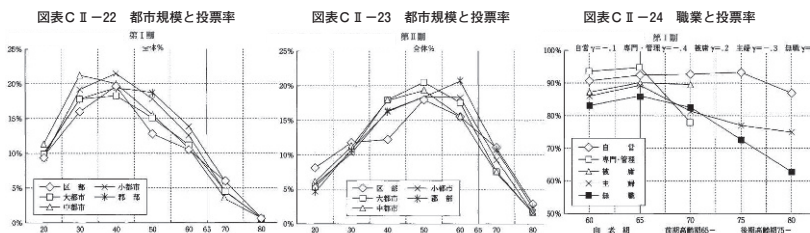


20 年以上は、75 歳までの実績をわずかに改善。③図表 C II-20 では、3 年→10 年→20 年の間で居住年での効果が出てきそうだ。④図表 C II-21 によると、旧 20 年を超える組とそれまで 10 年組にいた組を重ねたグラフで、→●で、新たな組が混ざって、第 I 期の 60-75 歳の 10%の低下を第 II 期では全くなしにしてしまった最大の原因となる。後 10 年経つと、投票率が 80 歳まで落ちにくい住民で占められる。

第四節 都市規模 図表 C II-22, 23, 24

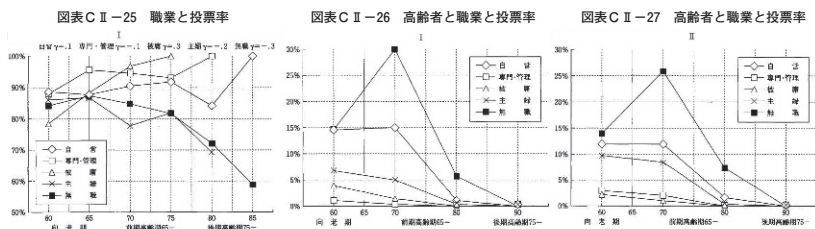
変数	○△×	○△×	○△×	○△×
都市規模	○	○ (△大都市を除く) 全て	○ (△区部)	○

①図表 C II-22 では、ほぼ向老期までは投票率は伸びて前・後期高齢期とも同じ角度で下がります。ほぼ 80 歳まで 10%強の降下。②図表 C II-23 によると、向老期・前期高齢期まで全体の傾向と同じ。後期高齢期の 75 歳では大都市で投票率をあげ、郡部では投票率が一定という傾向。新たに加わった大都市部の投票環境のよさがある。③現在の傾向は、前期高齢期はそれまでの向老期と前期高齢期との違いがなくなる。80 歳の大都市・区部・郡部が未だ落ち方が緩やかであり、そこでは 70 年代に比べ住みやすさが出てきた。④図表 C II-22, 23 では、郡部・大都市、区部のウエイトが、以前から高かった中・小都市と並び高くなった。



第五節 職業 図表 C II-25, 26, 27

変数	○△×	○△×	○△×	○△×
職業	○ (△自営)	○無職・主婦 (△自営・専門・管理・被雇)	○無職・主婦 (△自営・専門・管理・被雇)	○



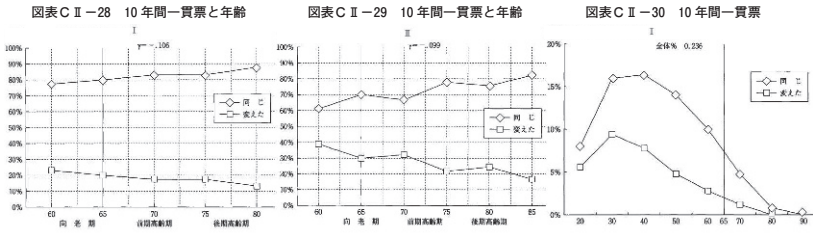
①高齢者の職業に関係するものは退職の問題。一応「無職」はほぼ高齢者。図表C II-25 ほぼすべての階層でその低落=不活発化。②図表C II-26, 27。第I期の時期には、55歳ぐらいまでが退職の時期。第II期の時期では60歳ぐらいまでが退職の時期。高齢化と選挙の投票率の仮説は、かなり多くのサラリーマンが無職に入り投票行動も無職階層に合致していく。第一に、第I期間において65を過ぎた頃から加齢の影響がみえるが、第II期間の同じ年齢においては、自営、管理・専門職者は依然活発に投票活動をするし、「無職」の人々もまだ加齢の影響は小さい。退職年齢の延びが人々の投票率に反映したものだ。第二に、前後期高齢期とも自営業者の階層の投票率は変わっていないし、85歳でも7名残っているが100%の投票率。第三に、後期は産業人口の再配置に伴って専門・管理階層が増え約10年選挙に在職のまま関与するという点である。③3つのグループでは前・後期高齢期では変化はなくなった。④図表C II-27では、無職=退職者層は70歳で3%ほど減り、残った層の政治的活発性は80歳でも1.2%高くなる。70歳では未だ職業構成の多様な様子が見れる。

第三章 その他の参加に関する変数

第一節 10年間一貫票 図表C II-28, 29, 30

変数	○△×	○△×	○△×	○△×
10年間一貫票	×図表C II-28	×図表C II-29	×図表C II-30	×一貫=老 VS. 交差=若

①老人の「頑固さ」を示す変数。若年では、第I期で一貫票は55%強でスタートし90%弱で終わっており、高齢化=一貫票化=頑固さを示す。図表C II-27は、向老期(60-65)から示してある。精神的変数は加齢にかかわらず伸び続ける。②依然頑固さは示すが、不安定であるが、60歳のスタート時点で見ると20%程度低く十分若いので安定するまで落ち着かないが、第I期では既にシーリング効果に達しかかっている。③

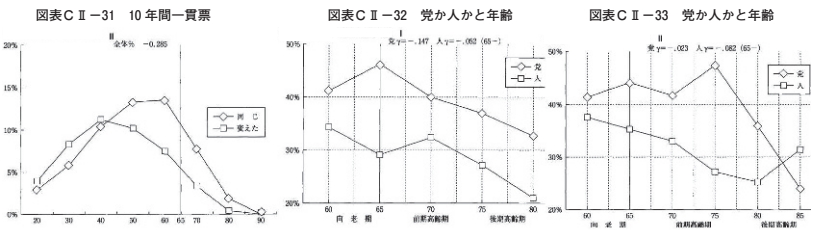


第Ⅰ期では65歳以降は先行する期間と同じく止まっており、第Ⅱ期では頑固化が85歳でも真つ最中、④図表CⅡ-30は数的には第Ⅰ期では中年時期に一貫票が多く、第Ⅱ期では50歳代以上に依存。

第二節 党か人か 図表CⅡ-31, 32, 33

変数	○△×	○△×	○△×	○△×
党か人か	○図表CⅡ-32	△図表CⅡ-33	△	△

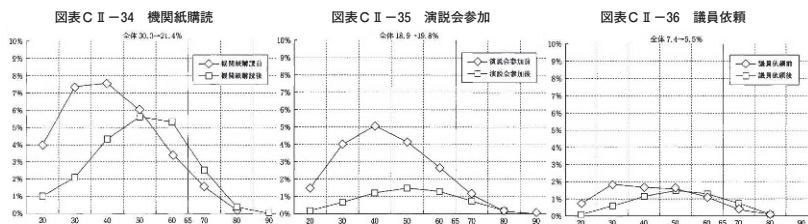
①図表CⅡ-32に見るように65歳以降降下する変数。②図表CⅡ-33によると、党のほうは75歳まで上昇を続けそれから急降下で衰退する。それに対して人を選ぶものは衰退もゆっくりだし、85歳では逆に上昇に転じたりする活発な次元の変数である。③図表CⅡ-33によると、党のほうは前期高齢期は向老期と変わらないが、後期高齢期になって突然急降下。人のほうは確かに降下しているがまた上昇したりする不規則な動きをする。第Ⅱ期は、党と人との間で活発な判断が実施されているといえる。④図表CⅡ-33によれば、いずれの意見もバランス上まったくかわりなかった。



第三節 機関紙購読、演説会参加、議員依頼 図表CⅡ-34, 35, 36, 37, 38, 39

変数	○△×	○△×	○△×	○△×
機関紙購読	○	○機関紙購読・ 依頼	○	○(機関紙購読・ 依頼)
演説会参加				△演説
議員依頼		(△依頼)		

①図表CⅡ-34, 35, 36によると、第Ⅰ期間においては「機関紙購読」、「演説会参加」、「議員依頼」は65歳から一直線に落ちており、参加変数は投票と同じく不活発化。
 ②図表CⅡ-34は、政党の接触方法として自派活字メディアが大きく一般紙・放送等に代われ、それが世代の影響として取り上げられる。②図表CⅡ-35は、それは向老期より若い世代に「演説」好きな世代が入っていて、そこが出した高い値の修正。図表CⅡ-35では、団塊の世代前後のグループにあたる。図表CⅡ-36の議員依頼は、前期高齢期半ばまで、跳ね上がって活発さを示しているが、70歳まででその後急速に落ち込む。③「機関紙購読」（図表CⅡ-34）、「演説会参加」（図表CⅡ-35）、「議員依頼」（図表CⅡ-36）いずれも前期中の落ち方の鋭さはなくなっている。しかし、後期高齢期は殆ど第Ⅰ期の前期高齢期と同じであるという意味で、前期高齢期と後期高齢期とは違う。



おわりに

一般的な傾向として、2001年の時点から12.5年以上前の明推協に見られる参加にかかわる変数についての65歳程度から不活発化が見られその後回復することもなく人生を終わっていた。2001年から12.5年以上こちらに近い選挙人では、一般的な傾向として、若干不活発化を緩めながら75歳まで活発であり、この歳を過ぎると急速に落ち始める。日本人全体の視点で見ると、この傾向に影響される部分がかなり大きいことも分かった。

「投票－棄権，地元か国か」，「10 年間一貫票」，「党か人か」など，態度で二つより多い選択肢での択一回答に該当するもの，もっと多くの選択肢の中からの択一，には注意を要する。

まとめると高齢期には政治意識・行動においても大きな変容をこうむる。しかし，ある種の意識はとどまるところなく進み（「一貫票」や「人」や「手腕，地元候補者」），ある種の意識・行動（投票等）はとどまるところがある（10 年ほど伸びるが）。

【Ⅲ】政治老年学の誕生（党派）－高齢者の党派行動

はじめに

人々の党派的行動は政党支持を中心として行動する。高齢者も二つの段階に分かれ，第一に，男女とも退職・引退しながらも高年期として何らかの形で送る段階（前期高齢期）と，第二に，超高齢期として死を迎える段階（後期高齢期）である。本論は，1976－2001 年の衆・参院選「明るい選挙推進協会」のデータから，従来の老人としての特質を持ちながら，新老人の党派選択行動で見出すのかという試みを分析する。

1976 年の衆院選から 2001 年の参院選のデータまでのプールを使いそれを 2 つに分ける。1989 年以前のデータを第 I 期データ（前論文では〈前〉）と呼び 1989 年より後のものを第 II 期（〈後〉）と呼ぶ。高齢者の区別を，前期高齢期（65－74 歳）と後期高齢期（75 歳－）に位置付け，必要に応じて高齢者に入る前の年齢層も取り上げる。

1. 第 I 期，第 II 期の期間に分けたのはこの 25 年ばかりの間に選挙人の行動・態度上の重要な変化があったから。2. 第一に，第 I 期に 30－40 代周辺に固まっていた団塊の世代が 40－50 代へと動いた。第二に少子化傾向が第 II 期の 40 代より下の年齢階層に現れ，高齢化傾向はそれより上の階層に現れる。3. 従来型の老人とは，基本的に老人の三つの試練＝退職，別れ，病気をもっており，これが再就職の意欲の広がり等によって，新老人に変わられる。仮説：高齢者の党派行動の特徴は参加行動と共通にもつものと，党派性独自のものがある。

(1) 共通：シーリング効果が存在する，(2) 共通：高年期も含めて成人政治活動期間が実に長くなる，(3) 参加：死ぬまで作用する変数とあるところで作用が有効でなくなる変数がある，党派関連変数は超高齢期政治意識として形を変えながらも健在，(4) 党派：超高齢型政治意識が存在する＝非政治化・保守化。それらは，活発な政治参加（投票者）の中であらわされる超高齢型政治意識と不活発な中であらわされる超高齢型政治意識との二つ，保守化は依然政治にかかわるといふときの選択であり，非政治化（＝満足化の政治的表現）は消極的選択をするときである。二期間においては二つが一緒になって作

用する第Ⅰ期と、非政治化を後に押しやり、自民化のみが作用する第Ⅱ期、(5) 共通：高齢期に入るとき（ここでは進入値と呼ぶ）の値が重要である。党派・満足感が問題となるときは選挙全年齢時の交点が重要（交点がずれていることがこの仮説にとって重要）。(6) 共通：長くその人に職業の影響を与えるようになった、(7) 共通：世代の影響が存在し、これを除くことが加齢とともに進む歴史的な課題。

分析においては、まず、該当変数が、①第Ⅰ期のデータの分析、②第Ⅱ期間は第Ⅰ期間と同じか違うかを示す分析、③現在は、前期高齢期と後期高齢期との間の違いは残っているか、最後に必要に応じて④全体の割合に対する貢献度はどうか、⑤老年学の一般理論と関係付けられるか、ということ述べる。⑤年齢の影響だけではなく、世代の影響も残っているし、その選挙だけの時代の影響も残っている。老年学との関連とともに、その議論を解剖学として別図にて掲載。

第一章 投票政党 図表CⅢ-1, 2, 3, 4, 5, 6

(1) 第Ⅰ期-63%で始まる（図表CⅢ-1）

- ・停止=の自民党投票の伸びは75歳まで
- ・交点=非自民とは40歳
- ・高齢期進入時の自民投票
- ・63%, 75以上・非自民

(2) 第Ⅱ期-56%で始まる（図表CⅢ-2）

- ・停止なし=高齢者は75~80~85と自民投票を一層強化
- ・交点=55歳弱
- ・高齢期進入時=自民投票・60%弱

(3) 第Ⅱ期内変動-80歳から自民化の傾きが急

- ・自民に一層投票するという点で第Ⅱ期間においては変わらない
- ・第Ⅱ期図表では約15%の差をもち自民化の動きが急
- ・80歳から超高齢型政治意識（保守化）が見える

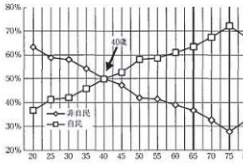
(4) 全体の中での高齢者内で自民・非自民間争いが活発になる（図表CⅢ-3, 4）

- ・選挙結果における自民層の屢々の敗北と（公明, 自由, 保守などの）連合政権を生むと同時に党内野党的な立場の小泉政権を生み維持させている力

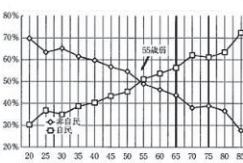
(5) 投票政党と解剖学-前期高齢期で加齢が止まる（加齢分析・コホート分析）

データを年別にはらして年功効果が実は世代効果ではなかったのか、ライフサイクル全体に変化がないかを見てみる。ライフサイクルでいうと若いとき革新的で、年をとるに従って自民化するというものである。何らかの時勢効果が入ると値は外れていく。そ

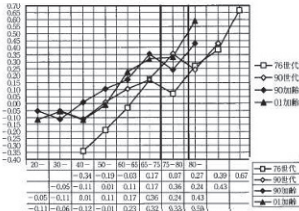
図表CⅢ-1 投票政党と年齢-第Ⅰ期.096



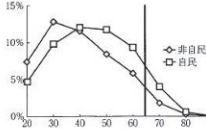
図表CⅢ-2 投票政党と年齢-第Ⅱ期.094



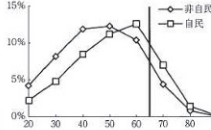
図表CⅢ-5 党派投票率率データ年齢・コホート



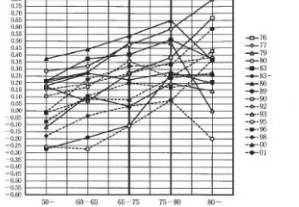
図表CⅢ-3 投票政党第Ⅰ期全体%



図表CⅢ-4 投票政党第Ⅱ期全体%



図表CⅢ-6 党派投票率高齢者データ



ここで、各データとも、25年代中間点・両端点のデータをとって仮定を検証した。結果は、ライフサイクル優位であるということである。

図表CⅢ-5によると、高齢期が常に自民化優位にあることを示している。保守化ばかりでなく、60歳から75歳にかけて76年のデータでは40歳から急速な保守化にあった人たちが60歳以降は急カーブを描いて保守の只中に押し込んでゆく。しかし、90年と01年では前期高齢期間中一時止まるか(01年)逆に非自民側に引き戻す(90年)ような動きを示す。

図表CⅢ-6：第Ⅰ期データ群では4データ中3データがこれに嵌り(直線的保守化)、第Ⅱ期データ群の中では6データ中4データがこれに(一時休止型保守化)嵌る。理由は、定年退職であるが、第Ⅱ期データ群では、職場の拘束から自由になることに関係が有りそうである。同時に、寿命の長期化と健康化と関係が有ろう。活発な選挙人に取り囲まれて、新老人たちは保守化開始を遅らせそのことにより成人選挙人として参加できる期間がぐっと長くなった。

第二章 政党支持 図表CⅢ-7, 8, 9

政党支持 自民・支持無し・非自民。

(1) 第Ⅰ期-前期・自民化→後期・非政治化 図表CⅢ-7

・自民支持(強+弱自民)の出発点=23%,

65歳高年期進入時=57%

前期高齢期 = 75 歳代まで 5 % 伸び。後期高齢期 = 止まる。

- ・ 非自民支持の出発点 = 26% で、65 歳の引退進入時には 23%

前期高齢期 = 9 % も下がる。

- ・ 支持無し、支持無しの出発点 = 50%，引退進入時 = 20%，高齢期 = 25% まで増える。超高齢型政治意識が作動。

(2) 第Ⅱ期－前期・弱い自民化→後期・自民化・非政治化 図表CⅢ－8

- ・ 自民支持の出発点 = 15% 65 歳引退時 51%

高齢期では、85 歳代まで 10 ポイント伸び続ける

超高齢型政治意識が働き続け規模も倍加

自民非自民の交点 = 40 歳

- ・ 非自民支持層

= 出発点は 20%，65 歳の引退進入時には 28%。（自民に 4 % の優位を取る多数派から 23% の差をつけられる少数派）

高齢期でも 12% まで 16 ポイントも下がり保守化の超高齢型政治意識が作動。

- ・ 支持なし層、出発点 65%，引退進入時 22%。非政治化の超高齢型政治意識作動。

(3) 第Ⅱ期内変動－自民化が前面に

- ・ 保守化、65 歳の進入口で緩やかな形で進み 80 歳の 50% で傾きが自民方向へ急峻。非自民側からの移動。80 歳になると、保守化の超高齢期政治意識が一層貢献。

(4) 全体の割合－若い政党から成熟した政党へ

- ・ 第Ⅰ期データ：自民支持において左肩上がり、高齢者の方もそこそこ多数派であるが、むしろ若々しい様子。無党派層は、若いころの 10 年ぐらいが無党派を続ける程度ですぐに党派層に移る。高年期には、非政治化と保守化が同時に始まる。

- ・ 第Ⅱ期データ：グラフでは自民支持層が右による。80 歳前後と遅く、超高年期政治意識。

党派対立の闘争場裏 = アリーナはぐっと右の中年方向。

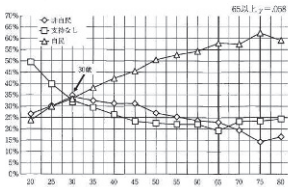
(5) 解剖学－超高齢型政治意識の非政治化が消滅し自民化一色となる 図表CⅢ－9

期間の両端と、中間点をとって示した。値は平均点。76、90 年は後期高齢者は 75 歳で伸びなやんでいたが、01 年度ではスムーズな右肩上がり。非政治化が優位となる第Ⅰ期後期高齢者と、自民化が優位となる第Ⅱ期後期高齢者の違いを表している。

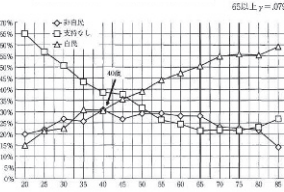
第三章 支持強度と性・年齢 図表CⅢ－10, 11, 12

- (1) 第Ⅰ期－女性に超高齢型政治意識・支持強度につき性別、図表CⅢ－10：従来の年齢と強度の相関の図と、下の横軸に、世代尺度を考慮。65 歳以上の女性選挙人が社

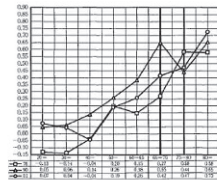
図表 C Ⅲ-7 政党支持と年齢-第 I 期



図表 C Ⅲ-8 政党支持と年齢-第 II 期



図表 C Ⅲ-9 政党支持各年次データ



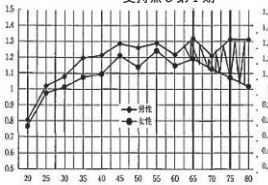
会化の遅れで支持強度の弱まりを生むにはあまりにも弱まり方が下向き。選挙権を持ってからの年齢を経るにしたがって支持強度は上がるし「抵抗現象」も絡んでなおいっそう強いだろうが事実下がっている。第 I 期データでは、女性に非政治化の超高齢型政治意識。男性のシーリング効果は 1.3 を上回るところにあるし、一定。

(2) 第 II 期-女性の超高齢型政治意識は消滅 図表 C Ⅲ-11：男性に 1.2 から 1.3 の頂点。女性に 1.2 強の頂点を見せ、女性の「超高齢型政治意識」は無縁。最も若いグループでは支持強度差はなくなる。

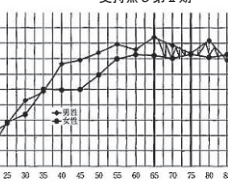
(3) 第 II 期内変動-第 II 期では頂点にとどまる 第 I 期は前期高齢期から急降下。第 II 期は頂点にとどまっている（シーリング効果）。

(4) 解剖学-超高齢型政治意識の晩年期への移行 女性高齢者にとって支持強度は加齢効果の関数になってきた。女性にとって選挙権が与えられていないときは、政党支持というのは遠い存在であって、選挙権が与えられると、中年までの女性は慣れるが、それより年を取っている女性は慣れない(図表 C Ⅲ-12)。強度が弱いままに晩年に至る。25 年たった 75 歳の 80 年女性は、やはり 75 歳で落とし始めるのだが、それは人生の終わり近くになってから。年齢の効果は超高齢型政治意識（非政治化）を押しやり、結果として男性と肩を並べるといふ効果を持つ。

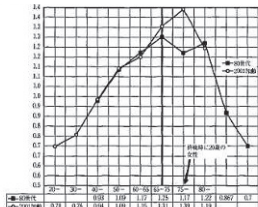
図表 C Ⅲ-10 支持強度と性別・支持無し第 I 期



図表 C Ⅲ-11 支持強度と性別・支持無し第 II 期



図表 C Ⅲ-12 女性支持強度平均値の年別グラフ・コホート (2011 年)



第四章 イデオロギー 図表CⅢ-13, 14, 15, 16

(1) 第Ⅰ期—政党支持と類似・交わることのない「革新」 図表CⅢ-13

- ・革新：出発点の%値=19%，引退進入時=13%。高齢期=75歳代まで3ポイント下げ。通して13%から14%と変わらない。
- ・交点は30歳にあり、この場合は「中間」と「自民」。基本的に政党支持に近い。

(2) 第Ⅱ期—政党支持と似るが保守化は鈍る 図表CⅢ-14

- ・保守は28%から出発し、一直線に伸び始め、85歳の67%で頂点。
- ・保守と中間派との交点は45歳。
- ・革新系は25%で出発し50歳まで上・下の動きがない。50歳を過ぎると革新は下がり始め10%で最低となり、50-85歳の差は10%の違い。
- ・保守は中間派を食べて太ってきたといえる。中間派は当初48%で出発し、80歳の20%強と30%は下落。80歳から保守に喰われることもなくなった。
- ・80歳で保守化は鈍化した。非政治化という政党支持ではなくなっていた超高齢期政治意識はまだ健在。

(3) 第Ⅱ期内変動—第Ⅱ期内変動

政党支持と類似するため省略。

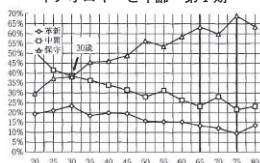
(4) 全体

第Ⅱ期, 第一に, 保守の最大のグループがもう高齢期にさしかかっているということ, 第二に, 中間グループがはっきりと存在しているということ。

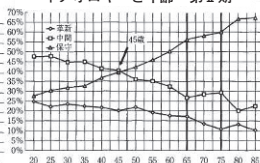
(5) 解剖学—イデオロギーの累積的效果

- ・図表CⅢ-15：76年から25年経過後の01年にはその平均値を保守のほうに上げた。値は「保守」「やや保守」「中間」「やや革新」「革新」の平均値。加齢図を世代図にそのまま重ねると一致。一定のコホートに特定の割合で保守化が得られたなら、時間の経過とともに更に保守化を勝ち取り得る効果が見られる。
- ・図表CⅢ-16に解剖を拡大。一部の例外を除き、前期高齢期より高齢者が保守化のベースを一定か、ないし落としている。全員に聞いた保守意識と投票者のみに聞いた投票政党のデータの違いにあり、投票参加を続ける元気な高齢者とそうでない高齢者の違いがあり、その意味では超高齢期の高齢者は二極分解している。

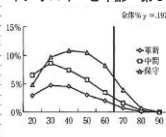
図表CⅢ-13
イデオロギーと年齢—第Ⅰ期



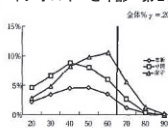
図表CⅢ-14
イデオロギーと年齢—第Ⅱ期



図表CⅢ-15
イデオロギーと年齢—第Ⅰ期



図表CⅢ-16
イデオロギーと年齢—第Ⅱ期



第五章 職業と政党支持

職業がデモグラフィックな要因の中最大の影響力。明推協データの中でその指標でもその前提がプールデータでも存在するという証明と、超高年期政治意識が第Ⅰ期では前期高齢期からすでに現れているということと、「背後にある」保革イデオロギーが、非高年期には職業と並行して影響を与え、高年期には職業を上回ってくることを明確化。(自前＝「店員や芸者などが他からの援助を受けずに独力で営業すること」WEB)。

(1) 第Ⅰ期一前期まで有効 非高齢者：保革意識も自前意識も貢献。

・前期高齢者ではいずれも有意性がある。図表CⅢ-17

・後期高齢期では、自前意識は有意性が消えている。

(2) 第Ⅱ期では後期でも有効 ほぼ第Ⅰ期と違いはない。図表CⅢ-17

・保革意識(約0.5)・自前意識(約0.1強)とも有意な貢献。

(3) 第Ⅱ期内変動

・超高齢型政治意識は、保革意識に独特な形で働き続ける。図表CⅢ-17

図表CⅢ-17 政党支持に対する職業と保革意識の回帰

	第Ⅰ期65歳以下	前期高齢期	後期高齢期	第Ⅱ期65歳以下	前期高齢期	後期高齢期
R2	0.32	0.39	0.23	0.23	0.30	0.26
(定数)	-0.05	0.20	0.22	0.03	0.15	0.27
保革意識	**0.52	**0.59	**0.47	**0.44	**0.52	**0.49
自前意識**	**0.15	**0.16	-	**0.13	**0.10	**0.13

* 有意性<0.00 以下である。

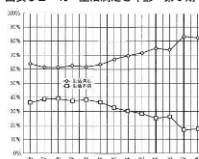
**非高齢者については、主婦・無職は除外してある。高齢者は投入してある。値はベータである。

第六章 生活不満と政治不満 図表CⅢ-18, 19, 20, 21

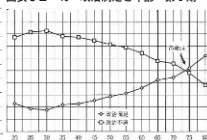
両変数の政治変数との類似性と異同：三宅は自民への投票が国政信頼と関係があり、生活満足度でもほぼ同様と指摘し、明推協のデータでも政党支持と関係付けると非高齢者は関係がある。高齢者中で前期は第Ⅰ期、第Ⅱ期とも非高齢者より強い関係があり、後期高齢者はいずれのデータからも政治満足、生活満足とも影響を下げる。しかし、両者は政治変数としては政党支持とはかなり遠い。政治満足は、不満が一方の政党に行けば他方の政党が不満を救済してくれる、という形で、デモクラシーの中で処理されるノーマルな解消の道がある。生活満足は更にかかわりが遠く、文字通り生活に関連した多くの要因が支持を弱める。それでも、関係はあるわけで、それがなぜ関係が有り、なぜ関係がなくなるのかを、示していくことが老年学と政治学との交流点の鍵となる。

政治老年学の誕生迄の歩み（神江）

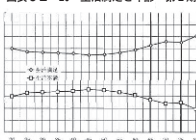
図表CⅢ-18 生活満足と年齢-第Ⅰ期



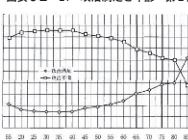
図表CⅢ-19 政治満足と年齢-第Ⅰ期



図表CⅢ-20 生活満足と年齢-第Ⅱ期



図表CⅢ-21 政治満足と年齢-第Ⅱ期



(1) 第Ⅰ期-生活満足最低・高 60-80%, 政治満足 20-60% 図表CⅢ-18, 19

- ・生活満足・政治満足=65歳以上は10%弱の変化。
- ・生活満足は満足・不満足の間がなく、政治満足は、75歳以前。
- ・生活・政治満足の最低・高値は、61・83%, 18・62%。
- ・高齢期進入値は75, 42%。

(2) 第Ⅱ期-政治満足のみ不満が高い 図表CⅢ-20, 21: 第Ⅰ期では75歳で止まって、一生を終える。第Ⅱ期では80歳でも満足・不満感の大きくなるのは止まらない。交点は80歳までは見られない。

- ・生活・政治満足の最低・高値は、おのおの64・81%, 14・61%。
- ・高齢期進入値は生活・政治満足おのおの73・31%。政治満足のみ5から10%不満が高い。

(3) 第Ⅱ期内変動-政治満足の80歳からの変動

- ・第Ⅱ期データでは65歳以上は10%弱の変化。5歳きざみのデータで見ると一挙に80歳から85歳において政治不満・満足が入れ替わるほど激しく、値の変化も10%強。80を超えて超高齢型政治意識=満足化。
- ・政治不満では65歳から80歳までいわば普通の選挙人と変わらず不満・満足を政治に現すが、80歳になって満足化する。

(4) 全体-生活満足化が政治満足化より多数派

- ・政治満足は、全体として満足層は変わらないが、不満層は若い時期の政治不満を持ってきている。
- ・第Ⅰ期では政治満足・不満足とも中年以下に分布、中年に分布が偏り満足者が多い。
- ・生活満足・政治満足ともに、高齢者の生活に満足する傾向、満足化傾向は明らかに生活満足化のほうが政治満足化より多数派となってゆき、図表CⅢ-19, 21に見るように、政治満足化は晩年でないと訪れない。

第七章 高齢者の党派選択のパス解析

第一節 データ

本論で対象とした諸変数をパス解析に投入。変数の方向のみ言及する。政党支持、保守意識、自前は、非自民-自民、革新-保守、非自前-自前である。政治満足、生活満足は、不満-満足。そして、超高齢型政治意識を後へ押しやる傾向その他などを総合的に説明するかどうかを試みしてみる。各時期とも前期高齢者、後期高齢者の2グループに分割。

第二節 結果

第Ⅰ期、第Ⅱ期間の違いについて高齢者のみを分析。

(1)後期高齢者には、政党支持に影響要因のうち直接影響を与えるものが少なくなった。第Ⅰ期、.28、第Ⅱ期 .37 と、その規定力を上げてきた。(2)第Ⅰ期後期高齢者は、第Ⅱ期より、政治不満と政党支持とは関係が一層深い。(3)職業は第Ⅰ期後期高齢者を除いて全て直接・間接に関係。第Ⅰ期時点では職業との関係が消滅。第Ⅱ期後期高齢者により職業としての世論が明確になったことによる。更に、前期高齢者の時期間比較は、第Ⅰ期前期高齢者はかなりな程度ストレートに保守化の途上にあったのだが、第Ⅱ期高齢者は若干それが遅くなった。

おわりに

証明すべき仮説につき、(1)シーリング効果が存在。自民投票で70%強、自民支持で60%、保守65%、生活満足80%、政治満足60%、(2)成人政治活動期間が実によくたった、(3)超高齢型政治意識(保守化=自民化、非政治化(=生活満足化)、現在は同意識は自民化のみ)が存在する、(4)高齢期に進入値・交点があった、(5)世代の影響が存在しており実はこの影響を除くこと=歴史的な課題であるが、に成功、(6)職業の影響はかなり長い間その人に影響を与えるようになった。

【Ⅳ】政治老年学の誕生(高松市)－高松市の新しい政治階層

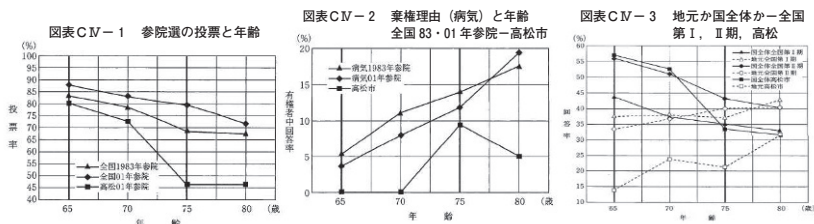
はじめに

高松市にもニューシニア階層。彼らは、従来型とは異なって、健康で、意識も活発で、独立志向を持ってボランティア等に積極的に関わる。『明るい選挙推進協会』のデータを使って、私の調査データと全国のニューシニア階層とくらべその発展度、意識の異同、を調べる。データは、2003年に高松市の65(60代前半が数名混じる)歳以上の高齢者

を対象にして面接調査（調査日：03年9月上旬，サンプルは300名）。

第一章 投票・棄権 図表CV-1, 2, 3

2001年参院選挙投票・棄権と，2003年衆院選投票予定。全国：図表CV-1，約20年前の1983年と2001年参院選。1983年の落ち方では70歳以降が急落である。その意味で，形としては01年の高松市のデータは1983年の参院選のデータ段階。激増する時期が01年では75歳代以降に押し下げられている。高松市では，70代から病気を棄権理由としてあげるものが多い（図表CV-2）。



投票理由

若い時代に「国全体」が「地元の利益」に大きく差をつけていたものが，高齢者になると地元利益に戻ってゆく。

図表CV-3に見るように高齢者の「地元」「国」間は挟み状に「地元」を選好する。全国の型に比べると高松市は既に現代の型を超えるほどになっている。

第二章 投票とデモグラフィー 図表CV-4, 5, 6

第一節 性別と投票率

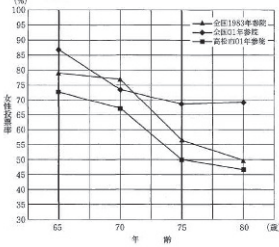
図表CV-4で見ると，現在になればなるほど，男は75歳までの低下はなくなり，女は一定の低下はあるものの改善され，その結果投票参加の面での平等化が達成されている。

第二節 教育と投票

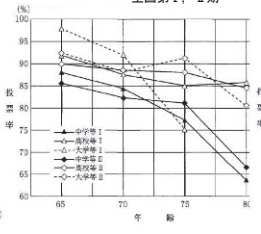
第II期は，図表CV-5によると，すべての階層で活発となっている中で数的割合も増えた大卒層が新たな進出者である。第II期で高校等と変わらない投票率を挙げる。

高松市は，図表CV-6によると，基本的には全国第II期と同じ型。

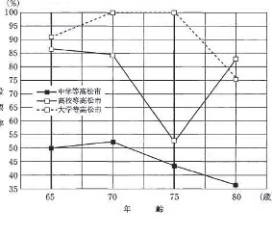
図表CM-4 女性と投票率 全国と高松市



図表CM-5 教育程度と投票 全国第I, II期



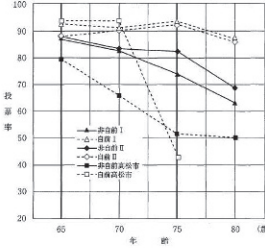
図表CM-6 教育程度と投票 高松市



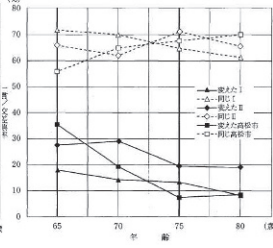
第三節 職業と投票 図表CM-7, 8, 9, 10

図表CM-7。高松市は、自前層のデータが75歳以上はノイズがある。非自前層はまだ現在のところ80年レベルの投票率しか出せない。

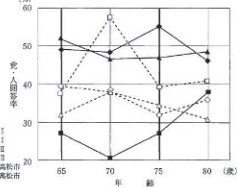
図表CM-7 職業と投票率 全国第I, II期, 高松市



図表CM-8 10年間一貫票と年齢 一全国第I, II期, 高松市



図表CM-9 党か人かと年齢 一全国第I, II期, 高松市



図表CM-10

選挙区	党	人	n
高松市	67%	33%	5
兵庫市民	44%	56%	18
株主支持なし	25%	75%	4
自民	38%	62%	51
無所属	38%	62%	24

第三章 参加とその他の変数

第一節 10年間一貫票

高松市では、65歳レベルの人は投票政党を容易に変えているが、70歳以上の人は全国第II期とほぼ同じ一貫票率。香川1区、最近の新進候補者の自民党への鞍替えも関係しているが、それに容易に応じる階層と応じない階層と、つまりニューシニアとシニアの二極化が顕著。

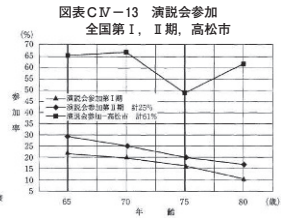
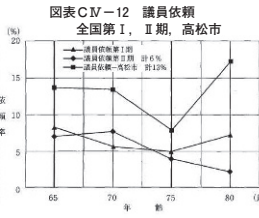
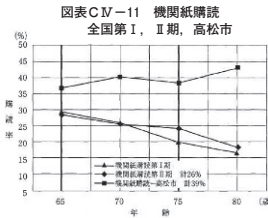
第二節 党か人か

人より党になると日本の選挙の近代化が達成される。高松市は、全国の傾向とまったく逆である。それは高松市の複雑な候補者達の動きにある。前期高齢者の中にこのよう

な、流動票や個人票等が相当規模混入しておりこれが高松市を全国と異ならせた最大の原因。

第三節 機関紙購読・演説会参加・議員依頼 図表CIV-11, 12, 13

高松市であるが、どの項目においても全国と比べて顕著に大きい結果。機関紙購読では、高齢期平均の差13%（全国は第Ⅱ期），65-80歳代で5%の上昇である。議員依頼では、高齢期平均の差7%，65-80歳代で3%の上昇である。演説会参加では、高齢期平均の差はなんと36%，65-80歳代で4%の下降である。県都高松市の政争の激しさと市民の政治演説好きの性格。

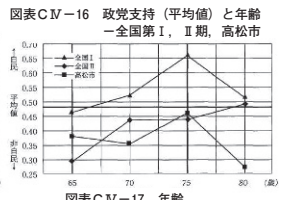
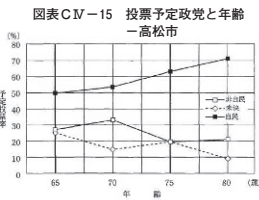
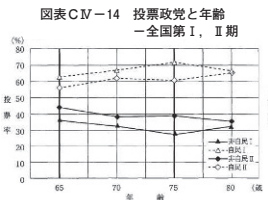


第四章 党派行動

第一節 投票政党 図表CIV-14, 15, 16, 17

全国プールデータとの違い。

全国では、すでに65歳で自民化ははじまっているが、6%の違いでしかないほど緩やかに自民化が進む。全国データでは、超高齢型政治意識（保守化とほぼ同じ）が現れるのは80歳になってからだろう。65歳以上の前後期高齢期は明瞭な対照を描いている（図表CIV-14）。



図表CIV-17 年齢

年齢	自民Ⅰ	自民Ⅱ	自民	非自民Ⅰ	非自民Ⅱ	非自民
65	25%	20%	23%	75%	80%	77%
70	20%	18%	19%	80%	82%	81%
75	18%	15%	16%	82%	85%	83%
80	12%	10%	11%	88%	90%	89%

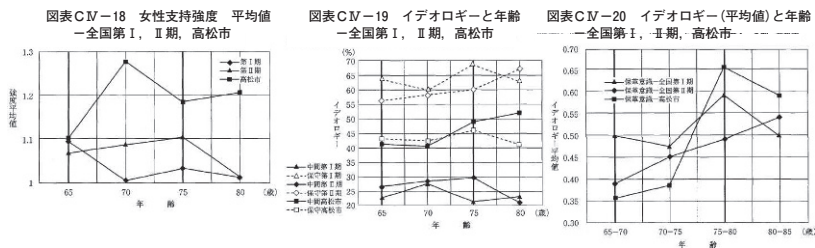
高松市では、70-75 歳期間に約 10% 自民支持を増やしている。更に同じ角度で 70% のシーリングに達するまで自民化をまっしぐらに進む。なお、投票予定であるので高松市のデータでは「決めていない・他」項目が入ったため、これがなかったなら、自民・非自民のほうに更に少しかさ上げがあると同時に、65 歳で保守化が緩むという点では、全国第 II 期と同じ結果を持っていただろう (図表 C IV-15)。

第二節 政党支持 図表 C IV-18, 19, 20

全国の結果では 80 歳を過ぎたら非自民が少なくなり支持なしと自民が増え超高齢型政治意識が現れているが、高松市の場合は殆ど支持なしがなくなるほど活発な「党派間」競争があっている (図表 C IV-16, 17)。支持強度と性・年齢では全国と高松市とはまったく異なる (図表 C IV-18)。

第三節 イデオロギー

高齢になるほど超高齢型政治意識の一つたる保守化が全国より強く出てくる。図表 C IV-19, 20 に見るように、保-革意識の平均値に直すとむしろ 75 歳以上は全国平均より非常に高い。前期高齢者は全国と同じく革新化されているものの、後期はまだ全国よりもより保守化を進めているといえるだろう。



第四節 政党支持の源泉 図表 C IV-21, 22, 23, 24, 25

従属変数は(1)政党支持で、明推協と同じく政党支持強度を入れてある。

独立変数は、(2)保革意識、(3)自前意識、(4)世帯状況、(5)家計。

高齢期は前・後期に分けて分析。

図表 C IV-21：前期後期高齢期とも、職業の要因はなんの働きもしない。

保革意識。75 歳以上になると、保革意識もしっかり残存するし、世帯状況にも影響

図表CⅣ-21 結果

高松調査	65-74歳	75歳以上
R ² 係	0.27	0.44
定数	.22	-1.37
保潔意識	**0.03	**0.46
選挙状況	—	**0.46
家計	—	**0.44

**0.01以下有意水準

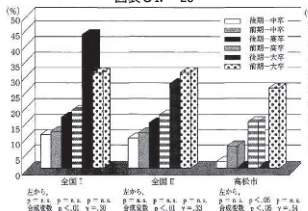
図表CⅣ-22

全国Ⅰ		全国Ⅱ		高松市	
学歴	n	学歴	n	学歴	n
後期-中卒	20%	29	9%	40	2%
前期-中卒	12%	109	11%	119	7%
後期-高卒	36%	11	14%	26	0%
前期-高卒	18%	32	17%	131	14%
後期-大卒	42%	11	27%	21	0%
前期-大卒	30%	25	30%	82	25%

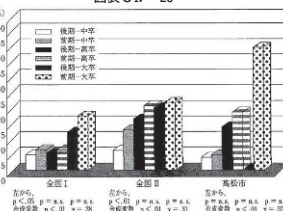
図表CⅣ-24

全国Ⅰ		全国Ⅱ		高松市	
学歴	n	学歴	n	学歴	n
後期-中卒	2%	8	6%	25	2%
前期-中卒	6%	54	13%	140	3%
後期-高卒	4%	3	16%	29	12%
前期-高卒	6%	16	20%	160	17%
後期-大卒	12%	3	19%	15	0%
前期-大卒	17%	14	21%	59	38%

図表CⅣ-23



図表CⅣ-25



を受け、そして家計もより大きな要因として現れ、超高齢型政治意識が現れている。

第五章 争点意識

重要度の表明と争点に対する諾否の判断に分けるなら明推協のものは前者に属するが、争点顕出性と呼び学歴と年齢で探してみる。

第一節 学歴と年齢による分析

(1)度数、(2)学歴（中卒、高卒、大卒）、(3)年齢（前期高齢期、後期高齢期）、(4)学歴と年齢によった合成変数により年齢を通してみた学歴差を見る。目的は、前期高齢期は非高齢者と等しく、後期高齢者は衰退してくるかどうかを調べ、それに高松市を加え、地域別差を明らかにしたいとする意図。

現実政治型－学歴強年齢強型

政治倫理系（図表CⅣ-22, 23） (1)高松市は、0から25%。(2)学歴上の差は、依然として存在。高松市は第Ⅰ、Ⅱ期に極めて近い。(3)年齢的に、高齢者は、前期反応は衰えないが、後期は若干衰える。(4)合成変数では、第Ⅱ期では全国でも $\gamma = .33$ なのに高松市では $\gamma = .54$ といっそう高い値。

公害・環境系（図表CⅣ-24, 25） (1)高松市では0～38%と大きな幅、(2)高松市ではこの緩和が取まっておらず、第Ⅰ期のまま、(3)この争点は民主型争点に近づく効果を持ち、高松市でもこの片鱗は見える。(4)高松市では $\gamma = .57$ と大きな値。

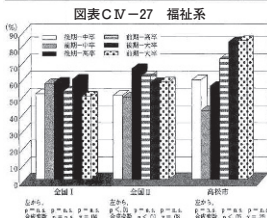
図表 CⅣ-26

全期Ⅰ	n	全国Ⅱ	n	割合Ⅱ	a	全期Ⅰ	n	割合Ⅱ	a				
後期-中学	49%	142	48%	29%	37%	25	後期-中学	15%	43	15%	67	5%	2
前期-中学	52%	448	47%	63%	49%	12	前期-中学	19%	179	19%	234	7%	2
後期-高卒	27%	30	65%	11%	53%	18	後期-高卒	6%	4	9%	271	24%	8
前期-高卒	32%	348	60%	47%	70%	60	前期-高卒	11%	31	12%	17	11%	7
後期-大卒	28%	15	96%	0%	86%	4	後期-大卒	12%	3	15%	84	0%	0
前期-大卒	43%	40	56%	15%	81%	13	前期-大卒	7%	6	9%	111	0%	1

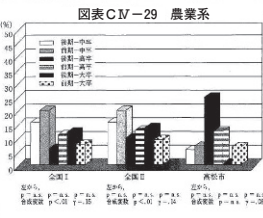
図表 CⅣ-28

全期Ⅰ	n	全国Ⅱ	n	割合Ⅱ	a	全期Ⅰ	n	割合Ⅱ	a
後期-中学	5%	16	3%	5%	23	7%	3		
前期-中学	7%	88	6%	6%	65	0%	0		
後期-高卒	5%	5	7%	13	3%	1			
前期-高卒	12%	33	8%	62	11%	7			
後期-大卒	18%	5	15%	10	0%	0			
前期-大卒	23%	19	11%	31	83%	10			

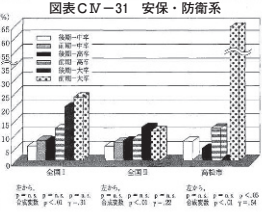
図表 CⅣ-30



図表 CⅣ-27 福祉系



図表 CⅣ-29 農業系



図表 CⅣ-31 安保・防衛系

加齢型一学歴弱年齢強型 図表 CⅣ-26, 27, 28, 29, 30, 31

福祉系 (図表 CⅣ-26, 27) (1)高松市では、40~81%と41%もの差を持つ争点。(2)学歴に関係なく誰でも老いてゆき老後を心配する、というしかも世代よりもライフサイクルに関係している争点である。しかし、高松市では尚極めてはっきりと学歴差が認められる。(3)考慮争点における、投票参加者の中での、超高齢型政治意識現象。高松市では後期高齢者に現れている。(4)合成変数では、高松市では $\gamma=.29$ という値。

農業系 (図表 CⅣ-28, 29) (1)高松市では、0~24%のそれほど変わらない度数。(2)大学等が低いという点では全国と高松市は違いがない。(3)高松市は高卒後期高齢期が目立って高い。(4)高松市では殆ど平板である。グラフを見ると高卒後期に大きな関心がある。

エリート型 高齢者分析では、やはり学歴強年齢弱の関係は出ている。

安保・防衛系 (図表 CⅣ-30, 31) (1)高松市は最高63%と突出。(2)大卒等がもつぱら安保・防衛論争にかかわる。(3)高松市は、安保・防衛論議はもつぱら大卒前期高齢者の独壇場。(4)高松市では $\gamma=.64$ 。革新県政拠点としての高松市のエリート主義文化を見逃すことはできない。 図表 CⅣ-32, 33, 34, 35, 36, 37

憲法系 (図表 CⅣ-32, 33) (1)高松市では、0~44%と安保・防衛問題と同じく大きな開き。(2)高松市でも同じ。(3)高松市では、第I期のレベルにとどまっている。(4)革新県政拠点としての高松市。

民主型

物価・景気系 (図表 CⅣ-34, 35) (1)高松市でも27~75%の大きな差。(2)高松市では前期高齢者の間では学歴差が厳然。後期高齢者では逆の関係。(3)高松市では、中卒を除き、後期高齢者は静かである。(4)高松市では $\gamma=.37$ と安保、憲法よりは低いが無視

図表CⅣ-32

	全国Ⅰ	全国Ⅱ	全国Ⅲ	高松市	n	
後期一中年	2%	4	4%	14	3%	0
前期一中年	2%	18	4%	37	0%	0
後期一老年	2%	2	5%	5	9%	0
前期一老年	3%	6	7%	46	21%	7
後期一大卒	14%	3	6%	4	0%	0
前期一大卒	15%	8	10%	24	44%	7

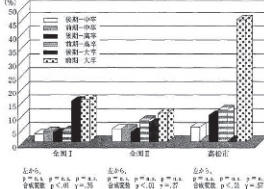
図表CⅣ-34

	全国Ⅰ	全国Ⅱ	n	高松市	n	
後期一中年	23%	68	27%	128	30%	13
前期一中年	36%	345	40%	590	20%	6
後期一老年	26%	17	40%	82	27%	9
前期一老年	56%	103	59%	431	50%	33
後期一大卒	29%	9	38%	46	20%	1
前期一大卒	42%	37	61%	185	79%	10

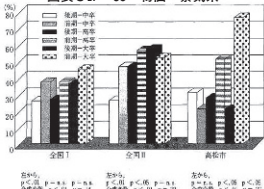
図表CⅣ-36

	本人と子	19%	33
単身	本人と子	19%	33
	単身	53	51
ニイ2世 $p < 0.06$	単身	62	19

図表CⅣ-33 憲法系



図表CⅣ-35 物価・景気系



図表CⅣ-37 農業問題

前期高齢期	後期高齢期	割合%	合計人数
自前	自前	5	40
ニイ2世	自前	15	33
$(p = 0.00)$			
後期高齢期	自前	10	51
ニイ2世 $p < 0.35$	自前	38	15

できない値。

第二節 争点考慮に対する社会経済的地位の回帰分析（高松市）

回帰分析に投じた変数は、争点に従属変数となり、独立変数は性、学歴、自前意識、世帯状況、家計の状態、を投入。高松市が何に属するかの問題。

現実政治型のうち、公害・環境では、前期高齢期に学歴にかなり強く関心を向ける傾向。

加齢型で福祉では、学歴は高卒以上が関心を示し、子と同居をしているか、単身が最も心配であり、夫婦で暮らすものは心配していない（図表CⅣ-36）。

有効な職業（自前意識）の反応を示すのは農業問題。後期高齢期にも多いということは農業が高齢期まで働けることをも示している（図表CⅣ-37）。

エリート型で、防衛問題と憲法問題は男性偏重のエリート主義（図表なし）。

民主型の物価・景気問題も、階梯を上って関心を高めているエリート主義の争点。

おわりに

高松市のニューシニアの参加、党派、争点選択行動について箇条書きにまとめておこう。

第一に、参加は、高松市の高齢者は投票、性、職業で見られるように、女性の落ち方が急、など、従来型のシニアの特徴を維持。……等。

第二に、党派性に移るが、高松市では、投票政党では70-75歳期間に自民支持を増やしただけでなく更に同じ角度で70%のシーリングに達するまで自民化をまっしぐらに進む。政党支持では、高松市は若干革新性が強いということは言えるが、後期高齢期

になって非自民の支持が弱くなる。

最後に、争点意識では、現実政治型で、政治倫理系と公害・環境系では、学歴と年齢は高松市でも作用している。加齢型で福祉系は尚学歴が関係しているけれども後期高齢期に争点における超高齢型政治意識(福祉)が現れている、農業系は学歴と一部の年齢とは逆相関をする。エリート型では安保系で大卒者にのみ突出して関心が高い。最後に民主型で、物価・景気系では、前期高齢者の間では学歴差が厳然としてあり後期高齢期は総じておとなしい。

回帰分析では、福祉や景気といった学歴差が不要なところにまで存在すること、男性文化が全国同様に認められることなど、いまだニューシニア社会に向けて発展途上。

【V】政治老年学の誕生(三木町)－三つの政治文化

はじめに 図表CV-1, 2

香川県東部に細長い形で位置する三木町は、高松市郊外の最も都市化された地域から東部のやや都市部から遠い地域そして過疎化しつつある南部域に分けられる。東地区には旧型、新型特養の二つが所在する。この三つの地域を現大字地域、2005年度に実施した町民調査の分析が本稿の課題。

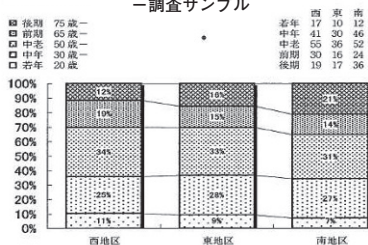
西地区では、人口8,461人(1955年)から11,389人(2000年)と2,928人増。就業者中農林漁業就業者は5.8%。東地区の、人口5,717人(1955年)から6,063人(2000年)と346人増。就業者中農林漁業就業者は9.8%である。南地区の全体では、人口12,839人(1955年)から11,317人(2000年)と1,522人減。就業者中農林漁業就業者は13.4%。

論述の基本的問題意識は高齢社会におけるボランティアを促進する政治文化は何であるか、である。特に焦点を、非高齢者も高齢者も携わる、高齢者に対するボランティア＝高齢者ボランティアに当てている。

図表CV-1 三木町人口各地区の増減

年次	三木町人口の増減						総人口
	西地区	南地区 K地区	南地区 T地区	南地区 H地区	東地区 S地区	東地区 I地区	
1955	8,461	3,091	4,520	5,228	2,440	3,277	27,017
1960	8,124	2,804	4,239	4,954	2,287	3,007	25,415
1965	7,960	2,492	3,800	4,735	2,141	2,888	24,016
1970	8,280	2,175	3,537	4,606	2,006	2,704	23,308
1975	8,748	1,950	3,642	4,814	2,090	2,686	23,930
1980	9,011	1,851	3,717	5,050	2,408	2,952	24,989
1985	9,808	1,730	3,771	5,049	2,586	3,077	26,021
1990	10,277	1,608	3,748	5,452	2,781	3,100	26,966
1995	10,966	1,488	3,603	5,811	2,825	3,073	27,766
2000	11,389	1,283	3,482	6,552	3,133	2,930	28,769

図表CV-2 町内における年齢別人口の割合－調査サンプル

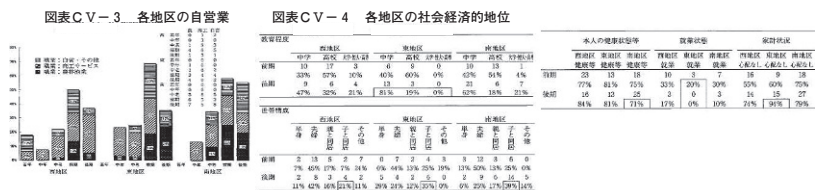


データを一覧から、三つの地域社会は次のような特徴を持っている。

1. 西地区は政治とボランティアにおいて非高齢層と高齢層との断絶、
2. 高齢者は断絶された中で、高齢者自身の助け合い、
3. 農村的地域の特徴として南地区では非高齢層との断絶を明確な形では見せない、
4. 都-農の中間に東地区が位置する。この高齢者は社会的活動も余りやらないが、政治に対する関与も低い。

第一章 三つの地域社会における社会経済的地位の違い 図表C V-3, 4

町の高齢者人口は20.6%（西地区が31%、東地区が31%、南地区が34%）。西地区と東地区では後期高齢者が前期とほぼ同じ、南地区では5%。都市から農村の連続体で表せば西地区-東地区-南地区となる。農林漁業・商工サ・自営業その他の高齢期に限定すれば「**図表C V-3 各地区の自営業**」によれば、農林漁業が西地区で前期高齢期が13%、後期が5%、東地区で前期が19%、後期が24%、南地区で前期が25%、後期が19%であった。「**図表C V-4 各地区の社会経済的地位**」では後期高齢期になると東地区のみ中学のみの卒業が多い。世帯構成は、単身または夫婦のみという世帯=都市的郊外型の西地区と東地区では独立居住の傾向が強かつ後期高齢期まで。後期になると「子と同居するもの」=いわゆる晩年型同居が1.4~3倍。農村型の南地区では、前期高齢期は比較的（63%）に独立居住で後期には圧倒的に子と同居の傾向（「子と同居」39%）。（**図表C V-4, 一部削除**）



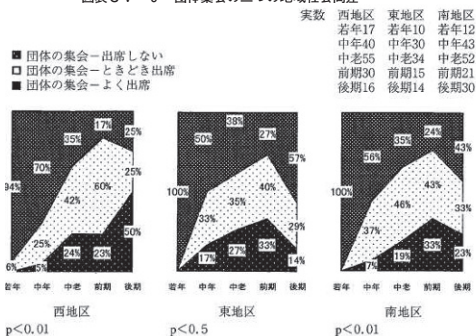
第二章 三つの地域社会における政治態度の違い 図表C V-5, 6, 7

第一節 政治参加

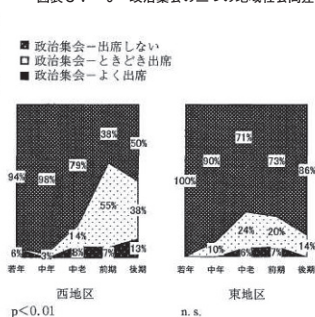
「**図表C V-5 団体集会の三つの地域社会間差**」。西地区の団体参加の特徴は、若-中年まで参加が上がらず、中老になると30%から66%に跳ね上がるという特徴を持つ。比較的「よく出席」するものがあるそれは増え続けて後期高齢期には半数に達するといういわば民主的な側面を持つ。

比較のし易さから、次に南地区を見てみよう。西地区と対照的に、既に44%という中年レベルから盛んな参加があつて西地区と同じ65%という参加へと連続。

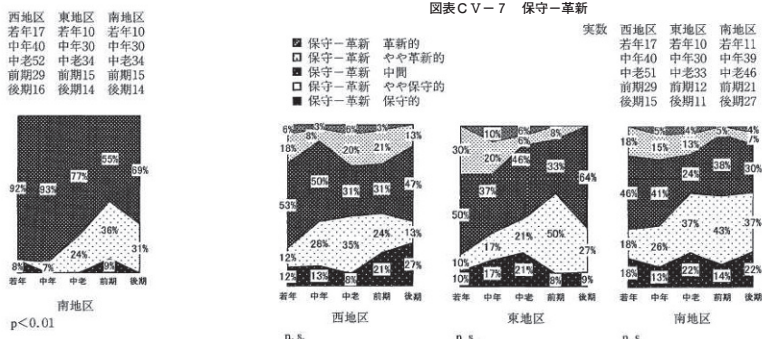
図表 C V - 5 団体の集会の三つの地域社会間差



図表 C V - 6 政治集会の三つの地域社会間差



図表 C V - 7 保守—革新



東地区は、中年では若干低いものの50%という参加があり、後期高齢期になると急落するという特徴。

団体集会参加傾向が政治集会参加（「図表 C V - 6 政治集会の三つの地域社会間差」）。西地区は南地区も中年までは政治集会参加は10%をきるという低さで、中老になると22%，前期高齢期62%，後期高齢期は12ポイント程度減るものの、まだ「よく出席する」ものは逆に増えている。南地区は、中年まで10%のレベルを維持し、その後は後期高齢期での落ち方が西地区より強い。東地区では非高齢者は南地区とほぼ同じとしても高齢期になると他地区で見られた盛り上がりは見られない。

50歳以上で活発な西地区、高齢者で不活発になる東地区、大体全ての年齢層で活発な南地区。

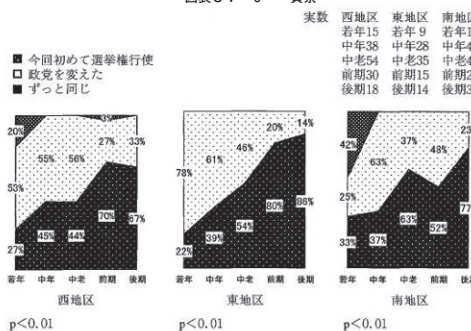
第二節 保守－革新

- ・保－革単発で議論。
- ・外的対象を持たず内面的な態度が主となる。その動きの特色としては日本人の特色として加齢＝保守化であり、それで主たる供給源となるのが「中間」派である。そして後期高齢期になると「中間」派が増える形で政治的に不活発化。
- ・「図表C V－7 保守－革新」（東地区）がその典型を示す。
- ・内訳は、都市部と農村部の違い（西地区は中老が保守の強化が進むし、同じ年齢層に革新的な階層が25%入り込み、結果「中間」が割り込みにくい。南地区では保守は中年で完成すると「革新」系の後退も）。

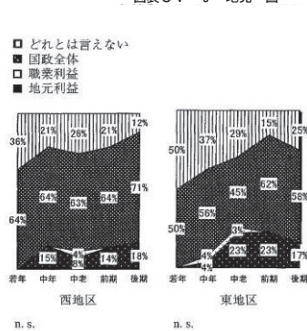
第三節 一貫票

10年間に同じ政党の候補者に投票したかという問題で加齢＝一貫票化を含む。また、加齢＝頑迷化を持ち、一生のライフサイクルで選挙における一貫票化を生む。政党によ

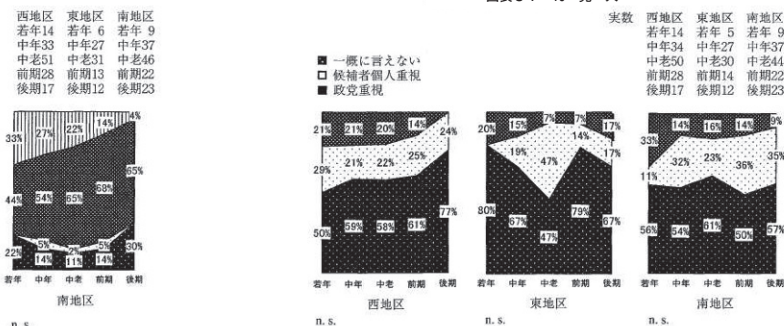
図表C V－8 一貫票



図表C V－9 地元－国



図表C V－10 党一人



り提供された候補者の選択であり、環境の変動に動かされる、傾向として右肩上がりであり上下の動きが加味されたグラフということになり、「**図表CV-8 一貫票**」でいえば、西地区や南地区にあらわされる。

- ・東地区の絵に描いたような右肩上がりの動きは、頑迷化と環境の変動に無関心な動き。
- ・西地区の後期高齢者は前期高齢者と同じという意味で既に超高齢期がなくなっていることを示している。

第四節 候補者に対する見方

「**図表CV-9 地元一國**」。「地元」組が都市部の西地区に少なく農村部の南地区に多い。「どちらでもない」とする超高齢期判断停止組が東地区にはかなりの部分いる。

候補者を候補者個人か、政党を重視して選ぶのか、の変数も投票者の内発的なもの。

「**図表CV-10 党一人**」には、西地区では「党」重視の傾向があり、他方、南地区では「人」重視の傾向を強める。

第三章 地域社会等に対する信頼

第一節 信頼 **図表CV-11, 12, 13**

変数は高齢者にもみ聞いたものである。会社や家庭のみの生活から退職・引退して地域社会へ出たの付き合い方、地域の目標まで共有して協力する（**図表CV-11**）、更に積極的にボランティアなどの社会活動をやる（**図表CV-12**）、地域の人との積極的な付き合いをやる（**図表CV-13**）、もっと一般的に愛他精神を問う（**図表CV-14**）もの。

(1)「**図表CV-11 集団に溶け込む**」は、個を殺して集団に従うという日本人の集団主義。都市部の西地区と異なり、前期高齢期で東地区と農村の南地区は集団主義賛成者7割超。

(3)「**図表CV-12 ボランティアなどとの関わり**」では、西地区が、前期高齢期53%、後期高齢期がなんと59%になる問題がある。

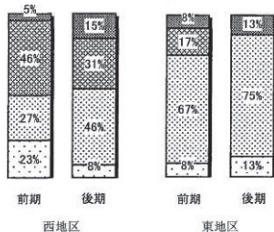
「**図表CV-13 地域の人との交際**」も同様の傾向。「**図表CV-14 人のために奉仕**」では、西地区と南地区が同じで、東地区も「地域の人と交際」を持続させる。

西地区の高齢者の人々は個人主義的でありながら活発にボランティア活動に打ち込み、かつ後期高齢期まで持続させる。南地区の人々は集団主義の価値規範を持ちながらも西地区に劣らず活発にボランティアにかかわるが、残念ながら後期高齢期にはひどく

政治老年学の誕生迄の歩み（神江）

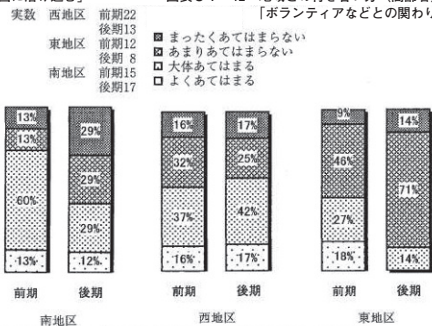
図表C V-11 地域との付き合い方（高齢者）「集団に溶け込む」

- まったくあてはまらない
- ▨ あまりあてはまらない
- 大体あてはまる
- よくあてはまる



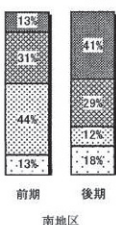
図表C V-12 地域との付き合い方（高齢者）「ボランティアなどの関わり」

- まったくあてはまらない
- ▨ あまりあてはまらない
- 大体あてはまる
- よくあてはまる

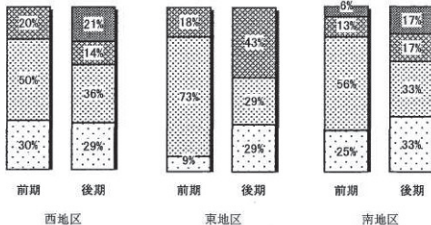


図表C V-13 地域との付き合い方（高齢者）「地域の人との交際」

- まったくあてはまらない
- ▨ あまりあてはまらない
- 大体あてはまる
- よくあてはまる



- まったくあてはまらない
- ▨ あまりあてはまらない
- 大体あてはまる
- よくあてはまる



衰える。東地区の人々は、南地区と同じく集団主義ではあるが、ボランティアのような特定の社会活動はまったくやらないし後期高齢期になると完全にボランティア等が提供するものを受ける側になる。

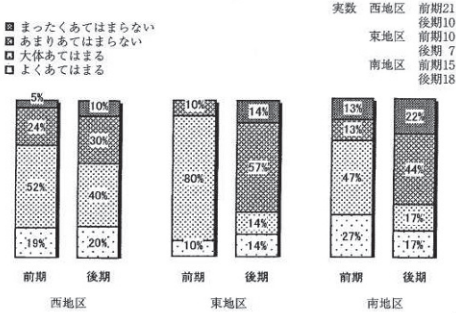
第二節 満足

「図表C V-15 生活満足」で西地区がその典型的な満足をしめず。東地区においては政治満足に連続し政治不満派が7割にも達するのである。

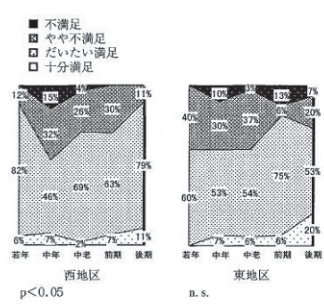
第三節 国政信頼

国政よりも地方の政治への信頼が強いし、農村部になるほどこの傾向は強化される。「図表C V-17 国政への信頼」を見ると、東地区では、高齢期にほとんどいなかった状態から、満足派がはってくる。

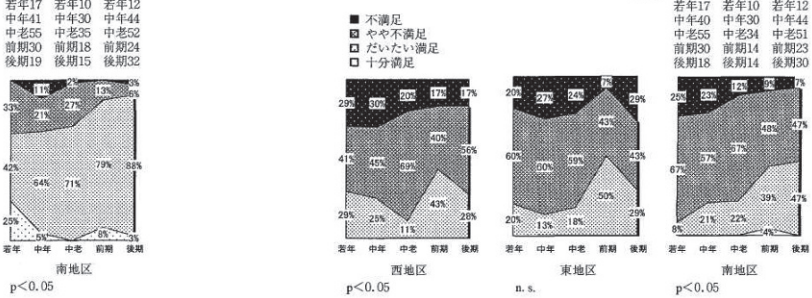
図表 C V-14 地域との付き合い方 (高齢者) 「人のために奉仕」



図表 C V-15 生活満足



図表 C V-16 政治満足



第四章 ボランティアと政治

第一節 高齢者ボランティア

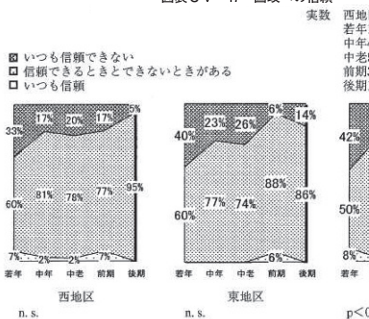
三つのグラフ (「図表 C V-19, 20, 21 高齢者ボランティアの経験—西, 東, 南地区」) がいずれも異なる形をしている。(1) 全体の量で言えば明らかに南地区が一番多い。次に西地区, そして東地区という順番になるだろう。(2) 高齢者ボランティア総量の違いから, 第一に, 都市型高齢者ボランティアの自治的性格の強まりである。第二に, 農村型高齢者ボランティアの全コミュニティ関与的性格の強まりである。第三に, 中老以上殆ど関与がなかったが中年のみが綿々と関与を継続させている東地区の存在は異常である。

第二節 ボランティア一般

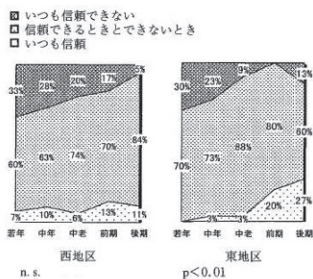
ボランティア, 「図表 C V-22, 23, 24 ボランティアの経験—西, 東, 南地区」に, 西地区と南地区とも同じような山の形をしている。他方, 東地区では高齢者ボランティアをいっそう歪にした形で, 中年におよそコミュニティの中で最大の集中をしている。

政治老年学の誕生迄の歩み（神江）

図表C V-17 国政への信頼

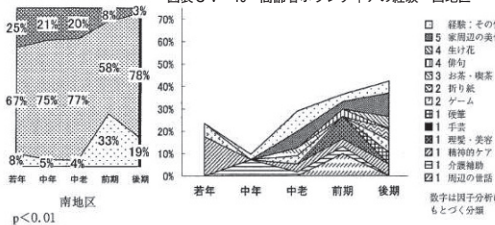


表C V-18 三木町政への信頼

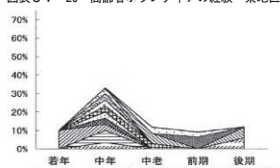


西地区 東地区 南地区
 若年15 若年10 若年12
 中年40 中年30 中年44
 中老54 中老34 中老51
 前期30 前期15 前期32
 後期19 後期15 後期32

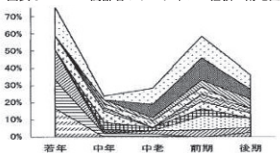
図表C V-19 高齢者ボランティアの経験—西地区



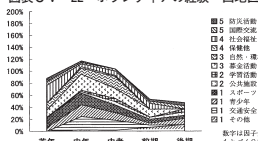
図表C V-20 高齢者ボランティアの経験—東地区



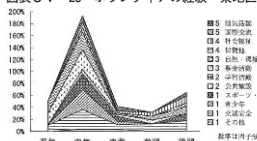
図表C V-21 高齢者ボランティアの経験—南地区



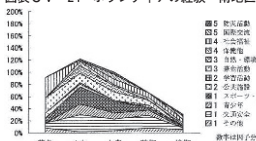
図表C V-22 ボランティアの経験—西地区



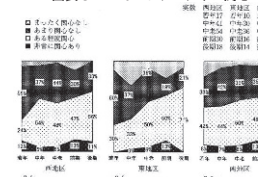
図表C V-23 ボランティアの経験—東地区



図表C V-24 ボランティアの経験—南地区



図表C V-25 ボランティア関心



図表C V-26 ボランティアに対する関心と政治集会参加、高齢者ボランティアの経験の回帰

	西地区	東地区	南地区
F2	0.12	0.11	0.19
高齢者ボランティアの経験	*0.2	(-0.1)	**0.3
政治集会	*0.3	*0.3	*0.2

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 () = 有意性なし。値は回帰係数、標準化係数。
 中老以上のサンプルによる。

第三節 ボランティアと政治

独立変数は、政治集会参加、高齢者ボランティアの経験である。

仮説としては、政治集会参加と高齢者ボランティアを経験したものは、ボランティア一般に対する関心も高めるし、今一層ボランティアへの意志を強める。特に、中老以降には顕著に現れる。結果は、ほぼ仮説通り、中高年における社会参加と政治参加がボランティアに重要な役割を果たすことを示している。ただ容易に予想されたことであるが、東地区の高齢者ボランティアがなんの役割も果たしていないことである。

おわりに

本論では、三つの地域社会における政治文化の違いとそれが持ちうるそれぞれの高齢社会への将来への対処の見取り図が描けたと思う。(1)政治的態度の違いで、政治集会に対する参加では、50歳以上で活発な西地区、高齢者で不活発になる東地区、大体全ての年齢層で活発な南地区ということになるであろう。…(2)地域社会等に対する信頼では、西地区の高齢者の人々は個人主義的でありながら活発にボランティア活動に打ち込み南地区の人々は集団主義の価値規範を持ちながらも西地区に劣らず活発にボランティアにかかわるが、東地区の人々は、南地区と同じく集団主義ではあるが、ボランティアのような特定の社会活動はまったくやらない。(3)現実に実践している高齢者ボランティアに焦点を当てると、都市型高齢者ボランティアの自治的性格の強まり、農村型高齢者ボランティアの全コミュニティ関与的性格の強まり、異常な中老以上殆ど関与がなくなった中年のみが綿々と関与を継続させている東地区の存在が明らかになった。

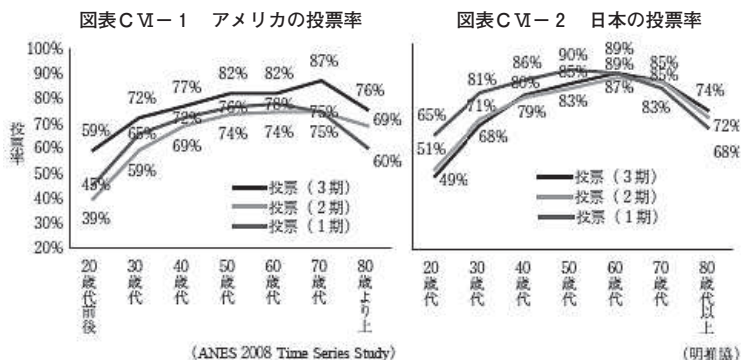
現状では、都市部も、農村部も、あるいは、その中間に存在するコミュニティも、それぞれの課題を持ちながらもボランティアに対する実際の行動をしめし、またその意欲を持ち始めたといえる。三木町に内包する異なる三つの政治文化に対して中高年における政治集会という共通する文化とが追加されたことは、高齢社会に対処する処方箋の発展に対し大きな期待を与えるだろう。

【Ⅴ】政治老年学の誕生（日米比較）—高齢者（若者）の比較

はじめに

アメリカと日本につき、投票参加と参加を阻害している要因を探り出し、国際比較等も含め、その克服の仕方。日本のものでは「明るい選挙推進協会」を使った分析と、アメリカ政治では「アメリカ国政選挙調査」を使った分析。約30年間の分析。2009年までのデータを3期データ、1990年から1999年までを2期データ、1980年から1989年までを1期データ。

縦型のデータ＝歴史データ、実際の分析は両国とも30年でそろえてあるが、歴史的



意味での変化はなかったのか、あったのか、ここで少なくとも「世論データ」の歴史的変動を扱う。

(1)グループ分け、最も若い層と高齢者層。投票率の低さを、どこまでを病的な状態と見なし、どこからをそれに犯されていない状態か、を見出し投票率改善のために役立たせていかねばならない。(2)アメリカでは、「第一章選挙運動との接触と投票」でかなり大きな接触が図られておらず(図表C VI-1, 2), 日本では、「第二章集団と投票」で若者がかなり大きな失点をおかした。日本では念頭においておくエンパワーする順位として、高齢者、若者、アメリカは若者そして高齢者。

第一章 選挙運動との接触と投票 図表C VI-3, 4

目的：掲載されている人物は、アメリカは18-29歳の若者、70歳以上の高齢者。日本は、20-29歳の若者、70歳以上の高齢者。ファイルを10年3期間分さかのぼる。

第一節 アメリカ

- ・時間的に縦の面で社会的なメディアの動き・人間のメディア接行動の変化などが見られるのは、今の段階でアメリカ。横断面：アメリカ、若者は、①, ②, ③のような人を説得する関わりでは(④を除いて)消極的で、逆に高齢者はキャンペーン中に人を説得する関わりでは大きいものがある(①), が献金も多くする(⑤)。
- ・テレビは高齢者に投票促進効果がない、新聞で若者が高齢者より高い。
- ・友人・家族との政治議論(⑧)がある、「消極的な」若者に対して「積極的な」高齢者が投票に行くように説得すればいい。
- ・回答者の年齢→若者に社会化の効果がはっきりと現れ高齢者のものは全然現れなかつ

図表 C VI-3 選挙運動と投票 (アメリカ)

若者	Naglerke R 2 条		
	B1) 時期 2000~2009 年	B2) 時期 1990~1999 年	B3) 時期 1980~1989 年
① 他人の票にキャンペーン中影響させようとしたか?	.360	1.151**	.833**
② 氏はキャンペーン中に政治集会・大会に出たか?	.702	2.246***	.121
③ 氏は又又は候補者のために働いたか?	-.582	-.369	.705
④ キャンペーン中に候補者のポスター・ステッカーを付けたか?	.857**	.612	1.277***
⑤ キャンペーン中受や候補者に献金したか?	1.265	.227	-.184
⑥ この選挙のテレビ番組を見たか?	.560*	.592***	.229
⑦ この選挙の新聞の記事をどれくらい見たか?	1.012**	.565**	.907***
⑧ 氏は家族・友人と政治について議論したか?	1-.296***	-.129**	-.121**
⑨ この一週間氏は家族・友人と政治についてどの位議論したか?	.015	.162***	.128***
⑩ R* 年齢 (年)	.069*	.029**	.079***
定数	-5.841***	-7.822***	-7.127***
Naglerke R 2 条			
高齢者 (70 歳以上)	.279	.341	.279
若者	Naglerke R 2 条		
	B1) 時期 2000~2009 年	B2) 時期 1990~1999 年	B3) 時期 1980~1989 年
① 他人の票にキャンペーン中影響させようとしたか?	1.612**	.983**	.292
② 氏はキャンペーン中に政治集会・大会に出たか?	-.269	1.070	19.481
③ 氏は又又は候補者のために働いたか?	18.405	.089	18.423
④ キャンペーン中に候補者のポスター・ステッカーを付けたか?	.841	.345	2.172**
⑤ キャンペーン中受や候補者に献金したか?	1.704**	.806	1.869*
⑥ この選挙のテレビ番組を見たか?	.181	.307	.619
⑦ この選挙の新聞の記事をどれくらい見たか?	.813**	.824**	1.184**
⑧ 氏は家族・友人と政治について議論したか?	-.222*	-.139**	-.118
⑨ この一週間氏は家族・友人と政治についてどの位議論したか?	-.122*	.078	.084
⑩ R* 年齢 (年)	-.029	-.021	-.034
定数	-19.741	-2.566	-41.662
Naglerke R 2 条			
高齢者 (70 歳以上)	.228	.206	.284

*この項は符号が反対であった。
*p<.10 **p<.05 ***p<.01

(ANES 2008 Time Series Study)

図表 C VI-4 選挙運動と投票 (日本)

若者 30より若い B3)	高齢者 70以上 B3)	B3)a 73~ 999		B3)b 1403~ 1737	
		若者 30より若い B3)	高齢者 70以上 B3)	若者 30より若い B3)	高齢者 70以上 B3)
日本2000年代					
(1) 情報接触-個人演説	.508	.932*	74	174	
(2) 情報接触-街頭演説	-.552*	.324	210	212	
(3) 情報接触-政党演説	.776	1.013	41	55	
(4) 情報接触-直呼	-.608**	-.409	231	378	
(5) 情報接触-電話	1.005**	-.273	106	285	
(6) 情報接触-運動員	-.554	-.748	57	106	
(7) 情報接触-新聞広告	.827***	.320	230	443	
(8) 情報接触-選挙公報	.963***	.814***	155	554	
(9) 情報接触-ビラ	-.420	.016	256	355	
(10) 情報接触-集書	-.210	.193	86	235	
(11) 情報接触-政見広告	.744**	.467	89	192	
(12) 情報接触-政教文書	-.138	-.254	191	262	
(13) 情報接触-党標図章	-.561	.186	28	115	
(14) 情報接触-掲示ポスター	-.085	.348	278	451	
(15) 情報接触-新聞報道	.602*	.612*	186	400	
(16) 情報接触-雑誌報道	-.462	.306	56	29	
(17) 情報接触-政見放送テレビ	.406	.68***	257	693	
(18) 情報接触-政見放送ラジオ	1.328	1.824*	32	91	
(19) 情報接触-テレビ報道	.454**	-.226	381	714	
(20) 情報接触-ラジオ報道	-1.070*	.698	38	71	
(21) 情報接触-家族	1.076***	.517	118	197	
(22) 情報接触-近所	1.707***	.457	35	91	
(23) 情報接触-友人親戚	.634**	1.081***	150	219	
(24) 情報接触-有力者	.180	18.993	20	12	
(25) 情報接触-地域団体	-2.220*	.677	9	22	
(26) 情報接触-職場	.803*	19.288	77	14	
(27) 情報接触-組合	.803	-1.619	29	8	
(28) 情報接触-業界	-.888	.123	30	16	
(29) 情報接触-各種団体	1.523	-.481	24	34	
(30) 情報接触-後援会	1.320	.504	26	73	
年齢 (年)	-.045	-.087***			
定数	.189	7.414			
Naglerke R 2 条					
	.271	.199			

*p<.10 **p<.05 ***p<.01

(明細編)

た。

- ・縦断面でグラフを見ると、(1)若者は2000年代になって選挙情報とは離れつつあるのではないかと、(2)高齢者が30年前の高齢者とはかけ離れて強くなったことである。アメリカの場合にこの30年余に若者と高齢者がどのように情報行動の変化・不変化をなしてきたかを見たわけだが、若者の消極的な状況は過去 (B(2), B(1)) ではなく B(3) になって初めて現れてきたものである。

第二節 日本

2000年に、投票者・棄権者いずれにも同時に聞かれて統合されたのでこれを使う。

日本の若者の選挙情報摂取活動は活発 (図表 C VI-2)。VS、高齢者の不活発。

- ・若者では電話が有効である、高齢者は唯一個人演説会が有効。
- ・説得的な情報は、若者には新聞広告、選挙公報、政党広告、高齢者は選挙公報。
- ・有権者自身の情報では、若者は新聞報道、テレビ報道であり、高齢者はこれらのものにラジオが追加される。
- ・一次集団からの情報は、若者は家・近所・友人・親戚が有効で、高齢者は友人・親戚のみ。

第二章 集団と投票

アメリカが客観的な形を取り、日本は回答者本人が入っている集団を聞いている、有権者本人と集団との関係を答えるものであるということである。

第一節 アメリカにおける集団と投票

・対象者に温度計を見せてその集団について答えさせる方法である。

変数の並びは「**図表CVI-5**」に示すとおり。民族・人種集団（～）、経済的弱者集団（～）、宗教集団（～）、イデオロギー集団等（～）、政府集団等（～）、政党集団（～）、が挙げられている。

・「3期」の分析。若者は、一番大きな特徴といえるのは「議会」、「連邦政府」、「两大政党」、「民主党」などといった政府、それを支える大政党といった既存の民主主義装置に対して、何の好・悪感も持たずに選挙に関わっているといった具合。

若者に「黒人」が肯定され「キリスト教原理主義」が否定される、高齢者（**図表CVI-6**）は、若者と較べて、高齢者の方がより社会集団というレベルではたった一つ。

第二節 日本における集団と投票

日本の明推協では、地域団体、産業団体、宗教団体、趣味の団体、の集団。表は「**図表CVI-7 集団と投票（若者-21世紀と20世紀-日本）**」、「**図表CVI-8 集団と投票（高齢者-21世紀と20世紀-日本）**」。全体的には、1980年から2005年の現在まで(1)町内会・区会（61.0%）、(2)老人会（8.4%）、(3)婦人会・青年団（9.6%）、(4)PTA（11.4%）、(5)農協等（7.3%）、(6)労働組合（8.2%）、……。

明確に高齢者の団体といえるものは老人会（又はクラブ等）。非高齢者の団体と呼ばれる集団としてPTAと労働組合。

町内会・区会、同好会・趣味の団体は、加入も多く、非高齢者も高齢者もともに入っているのが特徴である。しかも上昇気味である。

自己の団体の拡大・投票促進をもっぱら行う団体、他人の投票促進も行う団体、に分けて議論できる。町内会・区会、同好会・趣味の団体はまさに自分の利害に何の関わりもない中で、投票参加も言うという、無党派的なしかし投票促進団体の組織である。21世紀になって長寿を確立するとともに、周辺にまで気が回り始めたといえる。

同好会・趣味の団体であり、若者は1→2→3期と時期を追うごとに強まり、高齢者は若者の倍の値を出すほどに十分な投票を示している。

図表 C VI-7 集団と投票
(若者-21世紀と20世紀-日本)

日本	3期 若者 (20以下)	2期 若者 (20以下)	1期 若者 (20以下)
(1) 市内会・区会	-.006	-.193	.103***
(2) 老人会			
(3) 老人会・青年団	2.022**	.938**	.669***
(4) PTA	.024	.682	.442
(5) 協議会	21.020	1.666	.588
(6) 労働組合		.751**	.412**
(7) 農工商団		-.142*	-.876*
(8) 宗教学団	1.263**		.793***
(9) 同好会・趣味	.469*	.488***	.580**
Exp(B)	(1.567)	(1.462)	(1.462)
その他	-.063	1.435	-.079
定数	-.172**	-.038	.254**
Nagelkerke R 2 乗		.04	.039
*p<.10 **p<.05 ***p<.01 (明細論)			

図表 C VI-5 集団と投票
(若者-21世紀と20世紀-アメリカ)

若者	若者 18-29 3期 B3(1)	若者 18-29 2期 B2(2)	若者 18-29 1期 B1(3)
(1) アジアン・アメリカン	-.009		
(2) 白人	.000	.014**	.005
(3) チカゴ・ヒスパニック	-.008	.004	.003
(4) 黒人	.029***	-.004	.017*
(5) 混合	-.012**	-.010**	-.005
(6) 聖しい人々	-.004	-.012*	-.005
(7) 福祉対象者	-.003	-.009	-.014**
(8) キリスト教原理主義	-.014***	-.013**	
(9) カトリック	.000		
(10) ニダヤ教	-.014**		
(11) 環境主義者	-.001	-.005	.00
(12) ウーマンリズ	-.002	-.000	-.011**
(13) 保守	.002	-.005	.010*
(14) リベラル	-.010	-.009	-.008
(15) ゲイ・レスビアン	-.009**	-.006	
(16) フェミニスト	.001		
(17) 緑会	.006	.003	
(18) 連邦政府	.004	-.002	
(19) 州	-.006	-.005	-.009*
(20) 大企業	-.003	-.004	.005
(21) 国大政変	-.007	-.003	-.001
(22) 民主党	-.007	-.007	-.002
(23) 公明権リダー		.012*	
(24) 政治的投票派		.004	
定数	-.026	2.765***	-.112
Nagelkerke R 2 乗	.124	.092	.086
*p<.10 **p<.05 ***p<.01 (ANES 2008 Time Series Study)			

図表 C VI-6 集団と投票
(高齢者-21世紀と20世紀-アメリカ)

高齢者 (70+)	高齢者 (70+) 3期 B3(1)	高齢者 (70+) 2期 B2(2)	高齢者 (70+) 1期 B1(3)
(1) アジアン・アメリカン	.007		
(2) 白人	.018		
(3) チカゴ・ヒスパニック	-.009	.004	.007
(4) 黒人	.012	.014	.012
(5) 混合	.011	.030**	-.014
(6) 聖しい人々	.016	.005	** .034
(7) 福祉対象者	-.017	-.029**	-.025
(8) キリスト教原理主義	-.020*	-.002	
(9) カトリック	.014		
(10) ニダヤ教	-.010		
(11) 環境主義者	.010	.008	
(12) ウーマンリズ	-.030***	-.006	
(13) 保守	.004	.004	.006
(14) リベラル	.003	.013	-.019
(15) ゲイ・レスビアン	-.002	.011	
(16) フェミニスト	.002		
(17) 緑会	-.006	.005	
(18) 連邦政府	-.043***	-.003	
(19) 州	.001	.009	-.004
(20) 大企業	-.025**	-.011	.005
(21) 国大政変	-.020	.009	*.011
(22) 民主党	-.005	-.010	
(23) 公明権リダー		-.014	
(24) 政治的投票派		.004	
定数	2.189	2.074*	3.356
Nagelkerke R 2 乗	.195	.165	.164
*p<.10 **p<.05 ***p<.01 (ANES 2008 Time Series Study)			

図表 C VI-8 集団と投票
(高齢者-21世紀と20世紀-日本)

日本	3期 高齢者 (70以上)	2期 高齢者 (70以上)	1期 高齢者 (70以上)
(1) 市内会・区会	.662***	.318*	.612***
(2) 老人会	.413**	.456**	
(3) 老人会・青年団	.668	.114	-.011
(4) PTA		10.79	-2.184
(5) 協議会			
(6) 労働組合	.442	-.119	2.041***
(7) 農工商団	19.134	16.968	20.043
(8) 宗教学団	1.008*	10.363	.407
(9) 同好会・趣味	1.459**	2.100**	.714
Exp(B)	1.047***	.202	.991**
その他	(2.881)	(17)	(2.694)
定数	.903***	1.094***	.730**
Nagelkerke R 2 乗	.081	.062	.102
*p<.10 **p<.05 ***p<.01 (明細論)			

第三章 政治不信と投票

第三の段階では、外界の対象に密接な起源を持たず、全く質問が政治的でないものでもなく、政治不信はその中間の質問として機能する。

第一節 政治不信 (アメリカ)

第一項 外的不信

ANES が挙げたもののなかで、政府など外的対象をもつものを「外的不信」。

外的政治不信は、連邦政府は正義をやっていると信じている程度、連邦政府は一部・全ての利益のために運営されている、連邦政府は税金の無駄遣いをどの程度やっているか、政府職員は汚職をしている、である (「図表 C VI-9」, 「図表 C VI-10」)。若者も高齢者も殆ど政治不信を票に結びつけていない。

第二項 内的不信

対象を自分自身に持っている一群の変数がある。

政府職員は自分のようなものの意見を気にしている、(6)自分のような者には政府に言う権利があるか、政府は選挙において人々の考えに注意を払っているか、殆どの人は信用がおける・注意しすぎにならない、等である。

*「図表 C VI-9」, 「図表 C VI-10」の(7)の値が若者より高齢者がいずれも高い、等。

図表 C VI-9 政治不信と投票（若者—アメリカ）

	若者 B(3)	若者 B(2)	若者 B(1)
(1) 連邦政府は正義をやっていると信じている程度（1：全くない→4：いつも）	-.304	-.282	.082
(2) 連邦政府は一部・全ての利益のために運営されている（1：巨大利益→2：全てのもの利益）	.522**	-.330	-.081
(3) 連邦政府は税金の無駄遣いをどの程度やっているか（1：大いに→3：全然ない）	-.125	-.290	-.196
(4) 政府職員は汚職をしている（1：少しだけ→3：全然ない）	-.272	-.110	.098
(5) 政府職員は自分のようなものの意見を気にしている（1：賛成→2：反対）	-.020	.490**	.491***
(6) 自分のような者には政府に言ふ権利があるか（1：賛成→2：反対）	.587**	.555***	.916***
(7) 政府は選挙において人々の考えに注意を払っているか（1：そんなに→3：大きく）	.223	.276**	.070
	Exp(B) (†) (1.318) (†)		
(8) 殆どの人は信用がおける・注意しすぎにならない（1：注意しすぎ→殆どの人は信頼できる）	.398*	.886***	
定数	-.806	-1.680***	-2.136***
	Nagelkerke R 2 乗 .083 .141 .114		

*p<.10 **p<.05 ***p<.01 (ANES 2008 Time Series Study)

図表 C VI-10 政治不信と投票（高齢者—アメリカ）

	高齢者 70歳以上 B(3)	高齢者 B(2)	高齢者 B(1)
(1) 連邦政府は正義をやっていると信じている程度	-.039	.015	.081
(2) 連邦政府は一部・全ての利益のために運営されている	-.318	-.087***	-.026
(3) 連邦政府は税金の無駄遣いをどの程度やっているか	-.040	.418	-.381
(4) 政府職員は汚職をしている	-.034	-.381*	-.167
(5) 政府職員は自分のようなものの意見を気にしている	-.540	1.096***	.241
(6) 自分のような者には政府に言ふ権利があるか	.871**	.165	-.709**
(7) 政府は選挙において人々の考えに注意を払っているか	Exp(B) (1.516) (1.933) (†)	.416**	.559***
(8) 殆どの人は信用がおける・注意しすぎにならない	.927***	.448*	
定数	-.824	-.847	.288
	Nagelkerke R 2 乗 .110 .134 .051		

*p<.10 **p<.05 ***p<.01 (ANES 2008 Time Series Study)

図表 C VI-11 政治不満と投票（日本）

	3期若者 (30歳より若い) B(3)	2期若者 (30歳より若い) B(2)	1期若者 (30歳より若い) B(1)
政治不満	-.030	-.151	.028
定数	-.030	-.732**	.548**
	Nagelkerke R 2 乗 .000 .003 .090		
	3期高齢者 (70歳以上) B(3)	2期高齢者 (70歳以上) B(2)	1期高齢者 (70歳以上) B(1)
政治不満	-.193*	-.262**	.167
定数	2.347***	2.644***	1.271***
	Nagelkerke R 2 乗 .004 .007 .003		

*p<.10 **p<.05 ***p<.01 (明新協)

図表 C VI-12 投票参加と政治の基底的態度（アメリカ）

	3期若者 B(3)	2期若者 B(2)	1期若者 B(1)
・生活満足	.044	-.029	-.151***
・進歩-保守（連続）	-.006	.000	-.005
・党派性の強さ	.654***	.410***	.528***
定数	-1.033***	-1.381***	-1.502***
	Nagelkerke R 2 乗 .113 .047 .091		
	3期高齢者 B(3)	2期高齢者 B(2)	1期高齢者 B(1)
・生活満足	-.016	.244**	-.043
・進歩-保守（連続）	-.001	.006	.011**
・党派性の強さ	.438***	.216***	.319***
定数	.683	-.211	-.200
	Nagelkerke R 2 乗 .041 .020 .031		

図表 C VI-13 投票参加と政治の基底的態度（日本）

	若者 B(3)	若者 B(2)	若者 B(1)
・生活満足度	-.284**	.003	.019
・保守意識	-.129	-.006	-.054
・党派性の強さ	1.253***	0.956***	.888**
定数	3.266***	2.438***	2.579***
	Nagelkerke R 2 乗 .164 .06 .091		
	高齢者 B(3)	高齢者 B(2)	高齢者 B(1)
・生活満足度	-.067	-.288**	-.326*
・保守意識	-.103	-.218**	-.061
・党派性の強さ	.692**	.784**	1.011**
定数	3.203***	3.573***	4.374***
	Nagelkerke R 2 乗 .044 .067 .115		

*p<.10 **p<.05 ***p<.01 (明新協)

第二節 政治不満と投票（日本）

該項目と似たような動きをする変数として「政治不満」。この項目として1980年から明推協のデータとしては全期間にあり、また変数として与党・野党の選択（投票）と、与・野党の選択を超えて棄権を選ぶという無党派の面を持っている。「図表 C VI-11 政治不満と投票（日本）」を見ると、若者は3～1期まで一度も不満を票に反映しようとせず（不満の反映だったら別の形で反映させていたのか）に、その一方で高齢者の方は3、2期を政治不満=棄権という形で表明しているの、ここで棄権部分を抽出するのはある意味では易しい。高齢者集団の方は70歳になるとその半分は働いておらず、行動範囲は簡素である。

第四章 投票参加と政治の基底的態度

アメリカ、日本とも似たような変数。

第一節 投票参加と政治の基底的態度 (アメリカ)

アメリカでは、若者は殆どない。高齢者は、生活が悪くなったら投票する。党派性の強さは、両国とも強く、若者・高齢者の反応が全てのケースで観察。

第二節 投票参加と政治の基底的態度 (日本)

高齢者は1, 2期とも日本の方が生活がよくなったら投票する行動を見せる。イデオロギーでは、進歩-保守がアメリカ、革新-保守が日本。いずれも一つしか有効ではなかった。

若者-高齢者層ともにアメリカ-日本を通していえることは、「党派性の強さ」はいずれも全期間にわたって有効であり、これが現在の若者-高齢者の低投票率を深刻なものにしていけないのである。

おわりに

(1)「選挙運動」では、アメリカでは積極的な高齢者が消極的な若者に対して友人・家族との政治議論を通してもっと積極的になるようにすることである。(2)世代間の断絶は約半分の同居、日本では若者の選挙情報摂取活動は、電話、新聞広告、選挙公報、政党広告、新聞報道、テレビ、家族、近所、友人・親戚、職場と広がっているが、高齢者の不活発さは甚だしい。(3)投票と集団に対する好感度の関係では、アメリカでは若者と高齢者を比較すると前者の方が比較的多い。日本の場合は集団に加入の有無だったが、「町内会・区会」、「婦人会・青年団」は、前者が高齢者、後者が若者という専属のクライアントを持っている。(4)「政治不信と投票」では、アメリカでは若者と高齢者が合意している項目が多かった。明推協のデータでは政治不満を使って分析すると、高齢者に政治不満があると棄権する。(5)「政治の基底的態度」では、政党支持強度がまだ強く両国の国民を規定しており政治の根底で動揺する心配はひとまずない。

おわりに (全体)

ここまで来たので、私たちが進んできた道を再確認する意味で、図示してみよう。「政治老年学」全体図は、次に掲げる通り在職35年間のうち3つに分けられ、それを政治老年学A., B., C., に分けてある。それぞれの政治について、A. 内部のことは、A.【I】~A.【V】は、高松を中心とする四国各地の地方の選挙を巡って運動を中心とした人々の離合集散の動き=選挙運動を探り、全国に駆け上がった、その途中で大型計算機でしかできなかった統計処理がパーソナル・コンピューターでできるように

政治老年学の誕生A

四国政治文化					
テーマ	一貫派VS交差派	県政治指導者層の特徴、政党構造、市民の参加と支持の構造	運動員・有権者間属性の乖差が社会経済的側面、党有権者行動において異なるのか？	調査は、特に運動員、有権者間の直接的接縁が盛んな地帯を除き、地帯・世帯単位が動員される地方選挙に焦点をあてた	日本の選挙政治では、政策再編は政党支持の分布の変動という直接的表現をとらずに、候補者間意識の移動の発生から党派地図の変動の発生という間接的形をとる
補助的調査など対象への関与の程度が高い	(I)1・17/99宛切の状況、(II)安定性へ		1. 運動による態度・行動への影響	一般にとんた運動様式が採用されるか	変動パターンは思想主義的紐帯の弛緩・再結
高い一貫派率。	候補者個人、地		今後の運動のあり		徳島で観察された再編
A【I】	A【II】		A【III】	A【IV】	A【V】

推協データ変数表、明推協PC版、【VI】、【VII】

日本社会党の投票構造(Ⅷ) 一九六九年の総選挙は社会党にとって決定的選挙	地方版の選挙報道【IX】 地方版の選挙報道の特色
デモグラフィックな変化はしばしば短期的な変化を社会党に与えてきたものであ	(I) 政治社会の規範から外れる阿黨へのバイアスが一般認められた、政界内では、自民党に有利に、共産党に不利にするバイアスが認められ

政治老年学の誕生B (【I】、【II】)

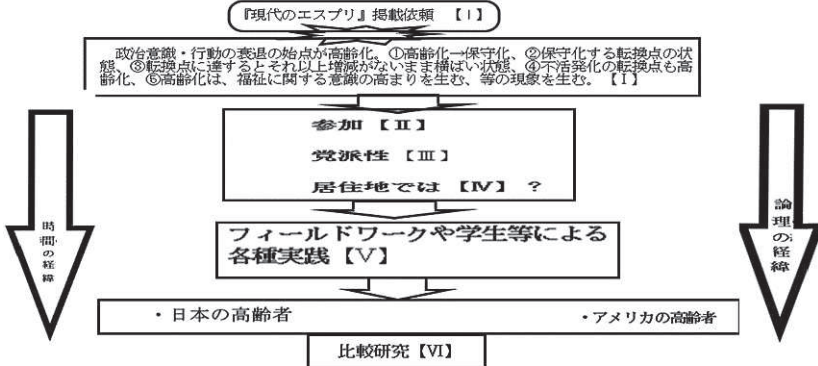
テーマ	主体	メディア	公開種	テーマの実現程度	調査場所	調査対象	内容分析	変数
伝達過程 A-1	大政党	新聞	大統領選挙	×	全美	有名紙	#内容分析	スペース測定
宣傳内容 A-1	候補者選挙上昇	*	下院選挙	○	全美	有権者	#世論調査	従一政党、議員候補者顕著性指標
テレビ討論 B-1	関心、知識増加	テレビ	大統領予選	○	OREG.	有権者	#実験的方法	集団分割
意見、政綱 C-1	選挙の競争度	下院選挙	○	全美	有権者	有権者、...	#世論調査 #内容分析	現状維持か変動か

絞り込み

マスコミ研究

- 【III】 アメリカ選挙の研究—全美選挙研究の選挙運動研究への利用状況—米国—
- 【IV】 アメリカ選挙の研究—アメリカの上段議員選挙
- 【V】 アメリカ選挙の研究—アメリカ総選挙キャンペーンの報道内容の研究

政治老年学の誕生C



なって、三宅先生からいただく明推協のデータと合わせて「明推協 PC 版」をつくり、一切をパソコンで完結できるようにした。実際の選挙を社会党に求め、日本なりの野党の在り方と PC 版の使い勝手の良さを試してみたり、「留学の準備」として研究室段階でできる「マスコミ研究」として地方紙の選挙報道とかをやった。

B. 内部のことは、まず B.【I】、B.【II】で、アメリカ政治学系雑誌の 1980 年代から「マスコミと政治」に関する論文を抜き出して、テーマ、主体、……を摘記し、それでこの場合 ANES という（もっといろいろ出来る）「絞り込み」を掛けて、次の【III】の「…利用状況」が出るようにする。【IV】、【V】の方はアメリカの総選挙を知るために、独自に進めてきたことである。まだ十分にネット環境が整っていなかった頃のドタバタであった。

そうして「…誕生、C.」では、帰国 3 年め『現代のエスプリ』から「政治老年学の方向性」というタイトルでエッセイを書いてほしい、という申し出があり私もどこか、心づもりはあって引き受けて、ここから参加、党派性、高松の有権者は？ データは明推協があるではないか、とどンドンひろがって、学生と高齢者と共に過ごすなど、の広がりを持つに至ったのである。そのうち、ANES の制限（利用はメンバー校のみ）もなくなっていた。

私の学生については、例の高齢者をサンプルで見出すほぼ同じころに、学生達が集まり始め、大学からそう離れていない老人ホームに行かせることから始めた。そこは、大学の裏手の山を登り切った所にあり、かなり古いタイプの施設だが、6 つばかりプロジェクトを擁す何百人の規模に上るところである。大体 10 人の（男女）学生から週 1 回 2 人、を派遣して全員参加するのを月 1 回と 10 年（主に養護老人ホームの人たちが相手）、をやり終えた。私が気付いたこの間の問題として、香川大学に老人を相手にする学科がないということである。私のものは言ってみれば「元気な老人」までを相手にする学問であり、普通じゃない人から、「普通の」暮らしをする人々までを対象とする全体としての老年学を網羅するような学問である。政治老年学はその系譜に属する。

ところで、お世話になった先生達をあげておこう。先ず植正夫先生は、九州大学時代の先生であり、修士、博士課程、香川大学時代において公私共にお世話になった人である。三宅一郎先生は、九大計算機センターの時代に SPSS を導入するときから御指導の下にあり、ここに掲載した論考でも触れている。

この原稿を書いて、今、校正刷りが送られてきた。私のことを考えてか考えてないか知らないが、非常に速い。とにかく、この原稿と今の状況とを重ね合わせて説明してみる。大動脈解離により（2021 年）新年の 1 月末に香川大学に救急搬送され手術 10 時間 ICU 2 週間、5 月に退院—その間ずっとデイケアに通いながら、その年の夏に構想を練り

すべてが終わるのが半年後という具合であった。私はこれを「仕事の遺言書」と名付けた。剣道、演劇、映画、デモ、車、囲碁、酒、海釣り、カラオケ、漫画、等、私が好きで年齢とともに消えていったものがある。残るは、映画と漫画であるが、漫画でも挑戦してみようと思うのは、シャキッと立つ高齢者の「漫画」を描くことである。【了】

（こうのえ・しんすけ 香川大学名誉教授）